
天蓋の百合 【吾妻橋の文吉留書】 参

小石 勝介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天蓋の百合 【吾妻橋の文吉留書】 参

【Nコード】

N9461U

【作者名】

小石 勝介

【あらすじ】

「うつされたって構いやしないさ。どこで死んだって誰も悲しんだりしない。ま、あたいは元気なだけを取り柄だから労咳だって尻尾をまいて逃げて行くさ」

捨て鉢には聞こえなかった。おろくの顔がひどく大人に見えた。二十四の亥之助よりも今は十六のおろくの方が年上に思える。

亥之助の首に手をかけたおろくはそのまま引き寄せて口を吸うと逃げ腰の亥之助に重なって布団の上へ倒れ込んだ。

「あたいの体の中からあの蛇男に汚されたところを綺麗に掃き出し

とくれ……」

吾妻橋文吉捕物帳シリーズ 夏編です。

劳咳の剣士が死を前にして幼馴染の恋人を捜しに江戸へ出てきますが、抜荷一味とかかわるようになり、凄惨な剣をふるいます。剣士亥之助を慕う天真爛漫な女おろくに支えられて人間として生きる道を模索しますが………

天蓋の百合

府中、そして八幡宿と越え、布田の入りに差しかかった。

布田は布田五宿と呼ばれ国領、下布田、上布田、下石原、上石原に分かれ旅籠が十軒に満たないほどの小さな宿場である。それでも五宿通いあるいは、五宿女郎という言葉が聞かれるところを見ると、それなりに夜は賑わうのかもしれない。

だが、腰の刀を外し茶店に腰を下ろした矢河亥之介には女郎買など思いも寄らぬことであり、望むべきでないことでもあった。床几には色の褪せた緋毛氈が掛けてあり、老女が一人店番をしている。茶を頼むとこれからの道中について考えを廻らした。急ぐ旅ではない。しかし、亥之介には時間がないこともおぼろげだが勘づいている。強い夏の陽射しは傾きかけていたが、その気になれば高井戸まで足を延ばせるかもしれない。相変わらず体は熱っぽいが江戸に向かうと決めてから体調はそれほど悪くないのだ。八王子の近在に住む掛かり付けの医者も最初は反対したが、亥之介の強固な意志に半ば諦めて江戸に住む懇意な医師への紹介状と甘草乾姜湯カンゾウカンキョウトウを多めに処方してくれた。

茶を運んできた御婆が深編み笠の下から総髪に髪を後ろで引き結んだ亥之介の顔を覗き込んで少し驚いたようだ。

「お侍さん、若いのにどこかお悪いのかい？ 顔が真っ青だ」

亥之介は薄く笑い返すと編み笠を外し、印籠から取り出した薬包紙を開いた。茶で薬を飲み干す亥之介を珍しげに見物していた御婆は、気付いたように慌てて茶を継ぎ足してくれた。別に薬を飲む侍が珍しかったのではない。細面の上に頬もこけ、夏だというのに色の抜けるように白い肌を持つ若侍の妖艶さについて歳も忘れて見惚れてしまったと言った方が正確かもしれない。

「御婆、あそこに咲いている花の名は何だ？」

葭簀の影に優雅で花卉の強く反り返った花が俯いて咲いていた。

花の色は赤みがかった黄色で暗紫色の斑点があり、紫褐色で細かい斑点のついた茎には小さく披針形で先端のゆるく尖った葉がついている。

その花は亥之介の心を捉えて逸らせせない。その花の持つ純潔と誇りが江戸の旗本に嫁いで行った幼馴染の紗枝と重なった。紗枝は亥之介と同じ八王子千人同心の娘で二つ歳下であった。そして、紗枝に会うことがこの旅の目的でもある。会わなくても遠くから見ただけでもいい。もちろん連絡などはしていない。ただ幸せな紗枝の姿を一目見て脳裏に焼き付けておきたいと無性に思ったただけなのだ。短い予感のする亥之介の生涯の中で、紗枝のそばにいた時間だけが輝いている。

「鬼百合も知らないのかい？ この辺りじゃどこでも咲いてるだろうに……」

「いや、花は見たことがあったが、男所帯なもので誰もその名を覚えてくれるものがいなかった。なるほど鬼百合か……確かに名は聞いたことがあるな」

自分の浅学さを素直に認めて屈託なく笑う亥之介に御婆もつられて笑ってしまった。

「おもしろいお侍さんだね。わしが三十も若けりゃほっとかないよ。ほれ、団子でも食べなさるか。わしが作った蓬餅も美味いぞ」

御婆が奥に入って行ったのと同時に、亥之介の来た方向から街道を必死で駆けて来る娘の姿を認めた。追われているようであったが、関わり合いになる気はない。

現実から逃避するように目を逸らした亥之介は、もう一度日陰に凜として咲く鬼百合に目をやった。

ところが娘は亥之介を見つけるや、駆け寄ったまま隠れるように背中へしがみついてきた。

身を振じらせた亥之介だったが、娘の力は思いの外強い。畑仕事でよく鍛えられたに違いない。

「その娘を渡せ」

亥之介の前に立った男は、汗と一緒に唾も飛ばしてくる。

居丈高にものを言う男であった。歳の頃は四十前後というところか。これ見よがしに着た紋羽織の裾が解れている。その紋に見覚えはない。

男の視線を逸らさずに見据える亥之介にその男の微かなたじろぎが見え始めた。激して見せる割には気の小さい男なのかもしれない。男の落ち着きのなさが亥之介の心に煩わしさを増大させていく。

それに被せるように娘の震えが亥之介の背中に伝わってきた。ふいに窮鳥懷に入ればという言葉が頭を過ったのは、亥之介の臍が曲がったせいかもしれない。背後の不快さよりも目の疎ましさにより虫唾が走ったというだけのことだろう。

「獵師も殺さず、か……」

元来冷淡な人間ではない。人が亥之介を避けるようになり、人の関わりを遠ざけていただけである。

「何を訳の分らぬことを言っておる。そこをどかぬか！」

亥之介の前で口の端から沫を飛ばす男は夏の日差しよりも暑苦しいものであった。

「返さぬと申せば？」

娘を追いかけて来た侍達が亥之介の冷たい声に一瞬狼狽して刀に手を掛けた。

不遜な振る舞いが目立つ小太りの男が主で、残りの寡黙な二人は従者なのだろう。

「抵抗いたさば、おぬしも斬る！」

激した男の声が震えている。

「人を斬ったことがあるのか？」

亥之介の凍るような声に男達は戦慄した。

「おぬしこそ！」

亥之介は腰に刀を差しながらゆっくりと立ち上がる。

病に冒された体は、まるで陽炎が揺れるように動いた。

「拙者もない……」

男達にふっと安堵の息が漏れた。笑いを浮かべた者もいる。華奢な亥之介の技量をはかり、自分の優位を感じている笑いであった。

茶店の御婆が後ろから娘を抱きとめて亥之介から遠ざけた。三人の侍は、みな体格がよく亥之介よりも肩幅が広くて胸板も厚い。威圧するように刀を抜く男につられて家来等も刀を抜いた。

「おぬしのような痩せ浪人を斬ったとて自慢にはならぬが、鏡新明智流田上軍兵衛参る！」

亥之介は静かに鯉口を切った。

「斬り合いならどっか他所に行つてやつておくれよ」

御婆が悲鳴のような声を上げた。

「心配いたすな。ちゃんと迷惑料は払つてやる。その男の埋葬料も含めてな」

田上軍兵衛と名乗った男が大仰な脇構えから亥之介に向かって袈裟がけに斬りおろしてきた。

亥之介の体が一瞬沈んだように思えた。

御婆も娘も思わず目を背けた。亥之介が斬られたと思った。それほど軍兵衛の踏み込みは凄まじかったのだ。

だが、茶屋の床几に大きな音を立てて倒れ込んだのは軍兵衛の方だった。

亥之介はさらに舞うように刀を回し、家来の一人の右手を刀の峰で打った。耳障りな金属音を立てて男の刀が街道に転がった。

「峰打ちだ。ただしお手前方の主の胸の骨、一本や二本は折れているやもしれぬ。用心して運んで行くがよからう」

戦意を失った男達に向かって亥之介は静かに言い捨てた。

「お侍さん、見かけによらず強いんだねえ。体の芯が疼いちゃうよ」主を背負い街道を這這の体で戻って行く侍達に右の下脛を指で引き下げてあかんべえをした後で、その娘としては精一杯であろうと思われる札を口にした。

「騒がせたな」

亥之介は娘を無視して、波銭を数枚床几の上に投げると編み笠に

手を伸ばした。娘が先にその笠を取り上げて自分の背に隠すと、馴れ馴れしい目で亥之介を見て笑う。

「どっかで見た顔だと思ったら、矢河のお坊ちゃんじゃないか。あたいだよ、同じ村のおろくだよ」

亥之介の意を介さぬ天真爛漫な娘の顔に見覚えはあった。自分の田を持たない水呑百姓の娘であった。勿論声を掛けたことも話したこともない。八王子千人同心も武士とは言いながら普段は農作業をしている。どこかですれ違ったに違いない。

そう言えば、その昔田の草取りをしていた亥之介は遠くの畦道で娘を苛めて囃したてる子供の声を聞いた覚えがある。

（ろくでなしのろく、うそつきおろく……、誰がホントは武田の御姫様だったって？ うそつくんじゃないぞ）

「……嘘吐きおろく」

「嘘吐きじゃないよ！」

頬を膨らませて怒るおろくの隙について笠を取り返した。その早技におろくの開いた口はしばらく閉じなかった。

おろくは勝手に亥之介について歩いた。無口な亥之介にまるで一人語りでもするようにずっと喋っている。聞きたくなくてもおろくの声が勝手に亥之介の耳へ入ってくる。

おろくは口減らしで隣村にある武家屋敷へ下働きに出されたようだ。田上軍兵衛はその屋敷の主であった。ただ自堕落な品行が目立ち、布団部屋でおろくは軍兵衛から乱暴に犯された。そんなことが何日か続いたという。

「あいつの口が臭いし、涎がねちゃねちゃして気持ち悪いから、逃げ出してきた」

おろくは屈託なく笑った。十六になったというその娘は、着の身着のままに逃げてきたためか普通の娘より肌の露出が高く、胸の谷間に滴る汗を平気で人目に晒していた。奔放さの中に危うさを孕んでいる笑顔が軍兵衛という中年の男を惹きつけたのかもしれない。

「しかし、お前が逃げ出しては、親父殿等に迷惑がかからぬか？」

「構うもんか！ あんな所に奉公に出しやがって。おいら親から捨てられたんだ。何かあったって知るもんか」

急に真顔になったおろくが亥之介の体を両手で掴み、揺すった。

「あたいをお江戸に連れて行っておくれよ。江戸に行けばあたいみたいなモンでも生きていけるって聞いた。後生だから、さ」

下から覗きこむおろくの腕を亥之介はつれなく外して、歩き始めた。

「いいじゃないか。邪魔しないよ。勝手について行くから。江戸までいいんだ。ね、いいだろ？ お金ならあるよ。出掛けにあいつの手文庫からくすねてきたんだ。ほら、ご覧よ。切り餅だよ。見たことあるかい？」

おろくの懷から出した手に二十五両の切り餅がふたつ乗っていた。「あたいの花代にしちゃあ安いもんだよ。ずっと縛られて甚振られてたんだよ」

ずっとこの娘の体が忘れられず連れ戻そうとしているのかと思っていたが、軍兵衛は盗まれた金を追って来たのかもしれない。

亥之介はつい失笑してしまった。盗人の肩棒を担いってしまったのかという自嘲の笑いだっただ。

だが、関わりたくなかった。おろくの身の上に同情も湧かない。それに、おろくの盗んだ金を追っているのであれば田上軍兵衛があれで諦めたとも思えない。追いつかれては迷惑だと、無意識に足を速めた亥之介は布田五宿をそのまま通り過ぎて行っただ。

おろくはそれでも亥之介に遅れまいと必死で後をついてくる。

高井戸で宿を取った。

下高井戸宿まで来れば、この街道の起点である日本橋まで四里である。

風呂から上がったおろくは途中古着屋で買った小袖に着替えて入って来た。陽に焼けた肌を割り引いてもおきやんな町娘のようだ。甲州街道を汚れた姿で歩く様子に目だけ大きい鴉のような娘だと思

っていた。言葉を呑んで見詰める亥之介におろくが笑った。

「どうだい？　言葉が出ないだろう。あたかも磨けばいい女なんだから」

亥之介の横に座って用意された盃にちろりから酒を注ぐ仕草は商売女のように慣れている。聞けばそんな経験はないと言うので、天性のものかもしれない。

宿を決めた時、宿帳へ勝手に妻おろくと記載させて笑っていた。

客が少なかったこともあるが、宿側も疑うことなく夫婦者ということで他に誰もいない一間に入れてくれた。それは亥之介にとっても都合が良かった。思いの外如才なおろくのはずんだ心付けも効果があったのかもしれない。そうでなければ真っ黒な鴉娘に深編み笠で着流しの亥之介がまともな客扱いをされるはずがない。

「だってこんな大きな娘じゃおかしいだろ？　いいんだよ、お礼さ。あたいの体、抱いてもいいからね。今夜はお坊ちゃんのお内儀さんだから」

甘えて亥之介の肩に撓垂れ掛かるおろくの体をさりげなく遠ざけた。

「あまり傍によるとうつるぞ」

「どっか悪いのかい？　確かに丈夫そうには見えないけどね」

心配そうに亥之介の顔を覗き込むおろくに亥之介は子供を諭すような笑顔で頷いてみせた。

「劳咳だ」

だが、それを聞いてもおろくは別段驚いた様子もなく、亥之介から体を離そうとはしなかった。

医者さえも亥之介から体を遠ざけて相對した。亥之介が触った湯呑みや触れた座布団など焼き捨てていることを後で知った。身内ですら亥之介を別棟に押し込め、最小限の接触にとどめるほどであった。

「知らぬのか？」

「血を吐いちゃう病気だろ。近所の姉さんがそうだった。近づくな

って言われていたけど、あたいはこっそり姉さんに会いに行ってた。姉さんだけあたいの話を聞いても嘔吐きだって笑わなかったんだ」

その近所の娘がどうなったか亥之介は聞けなかった。

この度の江戸行きに父と長兄は旅の理由も聞かず過分な旅費をくれた。千人同心の家に生まれたからには、お目見えは叶わずとも一度は將軍の御座します千代田の城を見てみたいという気持ちはよくわかると、何も語らぬ亥之介の気持ちを勝手に慮ってくれた。

厄介払いのつもりだったに違いない。帰ってくるなという思いが下男や飯炊き女からも伝わって来た。あるいは亥之介が思っている以上に病状が進行しているのかもしれない。周囲は亥之介の死を願っている。それも関わりのない土地で死ぬことを望んでいる。

「うつされたって構いやしないさ。どこで死んだって誰も悲しんだりしない。ま、あたいは元気なだけを取り柄だから労咳だって尻尾をまいて逃げて行くさ」

捨て鉢には聞こえなかった。おろくの顔がひどく大人に見えた。二十四の亥之介よりも今は十六のおろくの方が年上に思えるほどだった。

亥之介の首に手をかけたおろくはそのまま引き寄せて口を吸うと逃げ腰の亥之介に重なって布団の上へ倒れ込んだ。

「あたいの体の中からあの蝦蟇蛙に汚されたところを綺麗に掃き出しとくれ……、風呂でいくら洗っても落ちた気がしないんだ」

なぜか亥之介の心の中に抗う気持ちが生じなかった。されるままにする自分が不思議だった。細く見えたおろくの体は見た目よりも柔らかで弾む毬のようだった。目を閉じると紗枝の顔が浮かんた。

——紗枝も細かったが、この娘のようにしなやかなのだろうか

紗枝とは手も握ったことがなかった。会っても互いに無口でまともな目を合わせることもできなかった。

上に乗ったおろくは亥之介の兵児帯を解いて手を伸ばしてきた。しかし、どんなにおろくが頑張ってみても、亥之介が欲情することとはなかった。

諦めたのか、いつしか疲れたおろくはしどけない恰好のまま亥之介の手枕で寝てしまったようだ。

この娘は、本当に俺が恐くないのか？

おろくの寝顔はやはり少女のものだった。そして亥之介を頼り切っているようなそんな潔さがあった。清々しささえ窺える。

そっと腕を抜いた亥之介は周りに聞こえないように最初の咳を殺した。

しかし、止まらない咳を押さえるたびに消えそうな行燈の灯が揺れる。

懷紙で掌に毀れた血痰を拭った。おろくに振り回されてまだ甘草乾姜湯を飲んでいなかったことを思い出し、すぐに温い白湯で流し込んだ。

薄暗い部屋の中でおろくの寝顔が視界に入った。

昼間見た鬼百合の花が、おろくの顔に重なった。

そして、その顔は次第に紗枝へと変わっていった。

朝早くに高井戸の宿を出て、昼には内藤新宿を越えた。

暑い夏の日差しから体を休めるようにゆっくりと昼餉を取り八つ半には日本橋についた。甲州街道の起点であり亥之介の終着点である。

通りは、人の往来が絶えず亥之介とおろくの胆を抜く大型の呉服屋をはじめ、両替屋や大問屋が堂々とした店構えで軒をつらねて活気に溢れていた。店へ呼び込む奉公人の声、高過ぎると値引きする客の声、子供の泣き声、大声で同じ言葉を繰り返す香具師の口上、他愛ないおしゃべり、肩が触れたと始まる喧嘩の怒声……。

その喧噪は、一塊になってまるで地響きのうねりのように亥之介へ襲いかかり、目眩をともなったやり場のない苛立ちを募らせる。しかし、八王子では体験することのない賑わいにおろくははしゃいでいた。

「どっかで、お祭りでもやってるのかねえ」

団子を頬張りながら高札場近くの欄干から身を乗り出したおろくは、能天気にお城の方を見上げて言葉にならない声を上げ続けた。川添いには、日本橋蔵屋敷や四日市蔵地、江戸橋蔵屋敷など、諸国から船で江戸に入る物産を納める白壁の蔵が勇壮に並んでいる。

亥之介は城に背を向け魚河岸の喧噪を眺めた。城を見るとやるせない憤りが湧き上がってくる。あの城の中の侍達は、八王子千人同心のことを武士とは認識していないのだ。苗字を公称することは許されておらず、帯刀についても公務中のみと制限されていた。人別帳にも百姓と記載されている。だから人一倍剣術の修業に身を入れたのかもしれない。亥之介の妙技に紗枝が目を細めて褒めてくれたからだけではない。

往き交う者は浮かれるおろくをまさに田舎者と軽蔑して一瞥を投げかけてくる。一向に気にした様子はないおろくだが、見下して笑う着飾った小娘達よりもずっと目鼻立ちも整っているし、町に馴染んでいるように亥之介が思うのは、少しでも肌を重ねて情が移ったせいだろうか。

「そろそろお別れだな。楽しい旅ができた。礼を申す」

屹度睨んだおろくが眉間に皺を寄せてつかつかと亥之介に近づいた。

「こんなところであたいをおっぼり出すのかい？　悪い奴等に捕まっちゃったらどうしてくれんのさ」

「おぬしより悪い奴はおらぬ」

「涼しい顔してよくそんな冗談が言えるよ。あんたは世間知らずなんだから暫くあたいといった方がいいんだってことが分らないのかい」

いつの間にかおろくの呼び方がお坊ちゃんからあんたに変わっていた。

「何しにこんな所まで出てきたのか知らないが、労咳なんだからあたいと一緒にいる方が何かと都合がいいはずだよ」

おそらく一瞬かもしれないが亥之介の躊躇いをおろくに覚られたのかもしれない。亥之介の心の隙を突くようにおろくは畳みかけてくる。

周りは痴話喧嘩でも見るような顔で訳も知らずにおろくの応援をして行き違った。それにも元気づけられているようだ。無口な亥之介には分が悪かった。

突然、威勢の良かったおろくが無口になって亥之介の後ろを指さした。

振り向くと軍兵衛が五人の小者を含めた家来を引き連れて睨んでいた。

一度屋敷に戻り態勢を整えてから追いかけて来たのであろう。中には金で雇った用心棒らしき浪人も混じっている。

「問答無用！」

呆れて立ち尽くしている亥之介に向かって一斉に刀を抜いた。

軍兵衛の形相に橋に溢れた通行人がさっと道を開け恐いもの見たさの野次馬となった。誰が見ても亥之介の方が非力だし、多勢に無勢に見えている。

「何してやがる！」

突然人混みの中から聞こえた腹に響く大声に軍兵衛側が怯んだ。

大声の主は朱房の十手をちらつかせながら亥之介と軍兵衛の間に割って入ってきた。

「てめえら田舎者が！　ここを何処だと思っていやがるんだ。天下の大通りで騒々しいぜ、まったく。昼間っから段平振り回すなんざあ、穏やかじゃねえな」

亥之介はそつと鯉口にかけた指を外した。

「俺ア、八丁堀の島岡慶吾ってもんだ。話なら番屋でゆっくり聞かぜ」

大柄な男は定町廻り同心であった。顎髭が濃く目の大きい慶吾は、端午の節句に飾る鍾馗様に似ている。嘘か本当か総勢十人程の町奴と火消しの喧嘩の仲裁に割り込み、全員をぶちのめした武勇伝の持

ち主である。語る人間によつては、二十人だとも五十人だとも噂する。大人しく机の前で書き物をするよりも、竹刀を振り回す方が好きで、直心影流の免許皆伝であった。その噂は慶吾の目の前にいる軍兵衛や亥之介を除いて野次馬連中のほとんどが周知していた。

そして慶吾の後ろに控えている岡っ引きは吾妻橋の文吉とその下っ引き佐平である。深川での市中見廻りを終え、呉服橋御門内にある北町奉行所へ戻る途中だった。

「この男は、恥ずかしながら、わが屋敷に奉公する女中を手籠にし、逐電した者。町方の者にはお引き取り願おう」

軍兵衛は取って付けたような咳払いの後、慶吾だけに聞こえる小さな声で「妾に間男でござる」とうろたえながらも言い繕った。

まさか盗まれた金を取り返すために白昼堂々と刀を抜いたなどとは言えぬのであろうと亥之介は推測した。ならばおろくの持つている五十両は何か仔細のある金なのかもしれない。

「誰が手籠にしたって？ 納屋でふん縛って手籠にしたのはおめえじゃねえか」

亥之介はおろくの口を塞いだ。仲裁を買って出た八丁堀の同心に期待してみようと思った。しかし、欠伸しながら不用意に発した同心の言葉に耳を疑った。

「何だ？ てめえの逃げられた妾を追ってきた女敵討ちかい」

（女敵討ちだと？）

心遣いの欠如しているらしい同心の大声を聞いて亥之介は一瞬頭に血が上ったが、ぴったりと身を寄せるおろくの体のぬくもりが冷静にしてくれた。ふいに昨夜の瑞々しいおろくの感触がよみがえった。確かに女敵討ちと言えなくもない。

「間男見つけりゃその場でたたっ斬ってもお咎めはねえってもんよ。だがな、場所をよく考えな。ここを何処だと思ってるんだ」

亥之介は成程と感心した。町人ならいざ知らず、武士として女敵討ちは恥以外の何物でもない。公にできる話ではないのだ。それでも同心が出て来た以上、軍兵衛は罪に問われず亥之介を斬り捨てる

手段を瞬時に考えついたのだろう。そんな姑息さに五十両だけはおろくから取り上げて返してやろうと思っていた気持ちが失せた。

「ば、場所を変えればよろしゅうござるか。このままでは武士の一分が立ち申さぬ」

「ああ、人目につかねえ所にしな」

「ならばあの……」

軍兵衛は蔵地の西河岸を指さした。すぐ近くである。大通りではないというだけだ。

「よし、俺が見届け人だ。場所を移せ」

亥之介は慶吾の言葉を疑った。てっきり軍兵衛を追い払ってもらえるものだと思っていたのだ。

慶吾は文吉に命じて野次馬を追散らかそうとしたが、帰ると見せかけてみんな西河岸の場所取りに向かったようだ。

亥之介の勝利を信じているおろくだけ威勢がいい。

「二三筋斬らせてやりな。江戸じゃあ女敵討ちの示談は七両二分が相場だが、金のかからねえように上手くやってやる」

慶吾が軍兵衛に判らないように片目をつぶって見せたが、何を考えているのだろう。おそらくこの同心も亥之介の分が悪いと思っ
ているようだ。むざむざと斬られる気はないし、七両二分をただで渡す義理もない。さっさと止めろと思っただ、成り行きで西河岸に向かった。いや、正しくはおろくに引っぱられて行ったというべきだろう。

見物人がいるせいか胸を張った軍兵衛が亥之介に向かって必要以上
に大声を出した。

「先日は貴殿の卑怯な振る舞いに思わぬ不覚を取ったが、今度はそうはいかん。まずこの者から立ち合っていただこう」

卑怯って、何したんだ？

何だ、前にあの青白いひよろ侍に負けたってことかい。

賭け直してもいいかい？

聞きたくなくても野次馬の騒ぐ声が亥之介の所まで届く。いつの

間にか賭けの対象になっているらしい。溜息と一攫千金を望んだ声が交錯している。

おそらく軍兵衛方にも声が届いているのであろう。顔を真っ赤にして眉を吊りあげた軍兵衛が一步下がると入れ替わりに急遽雇われたらしい男が長尺の太刀を肩に担いで前に出た。

男は黙って軍兵衛に右手を突き出した。その掌に軍兵衛が忌々しそうな面持ちで数枚の小判をのせた。

「貴殿には何の遺恨もござらぬが、浮世の義理ゆえ覚悟召されよ。新当流相楽次郎左衛門直高と申す。参る」

言葉は慇懃だったが態度はずっと亥之介を威嚇している。おそらく軍兵衛から亥之介の太刀筋を聞いたのだろう。相楽という武芸者が亥之介を侮っていないことにある種の安堵感を覚えて徐に剣を抜いた。

「天真正伝香取神道流を少々嗜んでおる。矢河亥之介、お相手仕る」腰を落とした男は三尺を超える長大な刀身をもった中巻野太刀を肩に担いだままの構えで間合いを詰めて来る。

亥之介の自然体で隙のない青眼の構えに、同心島岡慶吾の顔色が変わった。

「待て！」

一時に発散された亥之介の強烈な殺気に慶吾の思わずかけた声へ亥之介は薄い笑いで頷くのと、相楽の剣が上段から凄まじい風を起こして振り落とされたのが同時だった。亥之介はまるで影が揺らめくようにすつとその下を掻い潜り、刀の背で胴を抜いた。

亥之介の早技に慶吾は蒼褪めて目を大きく見開いたが、峰打ちと分って安堵の溜息を吐いた。

しかし、慶吾以外の誰もが野太刀の男の陰に隠れた亥之介の方が斬られたと思った瞬間であった。

野太刀を落とした男が苦しうに白目を剥いて叢に倒れ込むと観衆の呆気にとられたどよめきが沸き起こった。

「見えなかった……いったい何時斬りやがったんだ」

岡っ引きの文吉があり得ないといった面持ちで慶吾を窺うと、腕自慢のその同心は胸を張って文吉を馬鹿にするように鼻で笑った。

「次は？」

亥之介が軍兵衛に向かって剣を突き出した。

「ざまあみやがれてんだ。顔を洗っておととい来やがれ！ この短小野郎！」

おろくが何度も跳ねてはしゃいでいる。

あのお武家は短小なんだってよ。

早漏な顔もしてるぜ。これはしまった、早漏し候なんてね。

それにひきかえあの痩せ浪人は、ああ見えても、あっちの方も凄えんだな。あんな愛くるしい娘が離さないときてる。

いい加減な野次馬の声が軍兵衛にも届いていた。

どす黒い怒り顔の軍兵衛は業を煮やして、剣を振りかぶった。

「かかれ！」

しかし、軍兵衛の家来共はみな腰が引けていた。構えた剣先が一樣に震えている。それは遠目で見ている群集にもわかった。意外な成り行きにみな固唾を吞んで今度は見逃すまいと静かに見守っている。

その場にいる者達は皆、一陣の風を感じた。

亥之介が八双の構えから軍兵衛等の間を駆け抜ける残像が、その場にいた者達の目に鮮烈な衝撃で残った。瞬いた後には、刀を叩き落とされ腕を押さえて蹲る軍兵衛等がいた。

さらに軍兵衛の刀は真ん中から折れて、切っ先の部分が軍兵衛の足の甲に突き刺さっていた。

間を置いて野次馬からどっと歓声が沸き起こった。

「その辺でいいだろう。返り討ちにあったってことで命のあるうちに帰りな。遺恨なしだ。いいな。今度俺の前に顔を出しや引括るかな。容赦しねえぞ」

思惑がはずれて形無しの慶吾であったが、軍兵衛に向かって恫喝に近い啖呵を切った。

賭けに負けた者達からの石礫を避けながら軍兵衛は供侍に担がれてその場から逃げ出して行く。

「騒がせてすまぬことをした」

刀を納めて亥之介は慶吾に頭を下げた。

「姓名は？」

ぞんざいに慶吾が問い質した。

さっき名乗ったのを聞いてなかったのかと幾分腹を立てながら亥之介は目の前に突き出された十手の先を見詰めた。

「……八王子千人同心矢河家の亥之介様だよ」

勝手におろくがしゃしゃり出て来た。

「あたいは、おろく。この人のかみさんだよ」

咳き込んで蹲りそうになる亥之介を支えながらおろくが自慢げに答えた。苦しくて気が遠のきそうになった亥之介にとって、おろくの吐いた嘘などかまっていられなかった。それよりもおろくの肩の柔らかさが亥之介の病を包み込んでくれるようで不思議な安堵感を覚えた。

「旅の途中と見たが、どこに行く？」

さらに慶吾が尋問した。

「江戸に仕事を探しに来たのさ。この人は千人同心の家に生まれたけど、三男坊なんだ。耕す田も渡して貰えない。だから江戸に出て来たのさ」

——嘘吐きおろく

そう吐き捨てたつもりが声には出なかった。おろくが勝手に作り話をしたがあながち間違っではないと亥之介は薄れゆく意識の中で思った。同心とのやり取りはおろくが懸命に亥之介を支えながら続けている。次第に胸の苦しさが消えて行った。懷紙を取り出してわからないように口の中の血を吐きだした。

「だいたい話はわかったが、今日はどこの旅籠に泊まるんだい。居場所だけは俺に教えちゃくれねえかい」

「何でそんなことまで八丁堀に教えなきゃならないんだ。あんたも

同じ同心じゃないか。仲間だろ？ それにまだそんなもん決まっちゃいないさ！」

犬のように吠えるおろくを制した亥之介は慶吾に詫びた。だが、今晚の宿、そして活動の拠点になる住処は欲しい所であった。

「差し出がましいようですが、どうでしょう？」

恰幅の良い男が腰を屈めて亥之介と慶吾の間に入って来た。供の手代を従えて大店の主といった風体であった。

「まだ宿がお決まりでないようですが、手前どもの家においでくださいませ。その辺の安い旅籠よりお持て成しいたしますぞ。あ、申し遅れました。手前は海産物問屋の主、常盤屋勘右衛門と申します。いえ、あなた。今の試合を見せていただきまして感服していた所でございます。いや、御見事な技を見せていただきました」

慇懃だがよくしゃべる男だった。恵比寿顔で如才なさを装っているが、油断ならない目の光に亥之介は警戒した。

「それに聞けば、お仕事も探しておられるとか。手前も商いの傍ら口入屋のようなこともしております。あなた様の腕前なら用心棒として欲しがる大店も心当たりがございます。さ、おいでなさいませ」勘右衛門は連れていた手代に命じて亥之介の荷物を持たせた。

「こいつあ渡りに舟だ。お前様、ご厚意に預かりましょうよ」

着ている物も上等で見るからに身上持ちの商人らしい常盤屋の申し出におろくは頗る乗り気になっている。固辞する亥之介を叱りながらおろくは勘右衛門の後に意気揚々として行った。思いの外氣力を使い果たした亥之介にはもうおろくに従う力しか残っていない。取り残された慶吾は幾分困惑ぎみに亥之介を見送った。

「行っちゃったよ」

腕組みした慶吾が溜息を吐いた。

「ええ、困った所について行きましたね」

野次馬を追い払って戻って来た吾妻橋の文吉が慶吾の隣で同じように溜息を吐いたのには理由がある。

常盤屋は抜け荷の疑いがあり、今内偵中であつた。御禁制の珊瑚、

鼈甲で細工した簪、笄などを利用し大奥とも強い繋がりを持ち、確固たる証拠を掴まねば横槍が入る可能性も視野に入れなければならない。特に憂慮される問題は、密輸した阿芙蓉の蔓延であった。つまり芥子の実から生成された阿片を煙草のように女郎達へ吸引させ、客を取らせている情報が入っている。末端で阿芙蓉を小分けし密売するやくざ者も二重三重に取引を複雑化させ卸元の勘右衛門まで辿り着けない工夫がされていた。深川の岡場所にある廓の奥で阿片窟と思われる場所に潜入した奉行所の隠密は、阿芙蓉の禁断症状を見せ大川へ飛び込んで死んだ。これは明らかに挑戦であり、殺された隠密の弔い合戦だと意気込む奉行所であったが、阿芙蓉と常盤屋を結び付ける手掛かりは隠密の死で失った。

常盤屋勘右衛門――。裏の顔を巧みに隠した、なかなか尻尾を掴ませない狡猾な男であった。

「あのお侍さんも用心棒にしてしまうつもりでしょうかね」

慶吾が困った顔で頷いた。

「旦那とどっちが強いんです？」

「さあな、奴は死ぬことを恐がった様子がねえ。その分、おめえんチの長屋のお師匠さんより強えかもしれないねえな」

「てえことは旦那よりも強えってことか……」

慶吾が軽く文吉の頭を小突いて笑った。

お師匠さんとは長屋の一棟で手習い指南所を開いている藤堂数馬のことである。文吉の捕り物にも協力的で、父親は西国の小藩で剣術指南役だったが、上意討ちの旅に出たまま、いつの間にか江戸に棲みついていた。

「ほっというていいんですかい？ 何ならあっしがあのお侍さんの塹を世話しやしょうか」

「……文吉、そこに捨てられてる丸まった懷紙を広げてみな。ただし、そオオっとだぜ」

文吉は背筋が寒くなる予感がした。慶吾も同じことを考えているのかもしれない。矢河亥之介という侍の痩せ方、肌の色は尋常では

なかった。それにおかしな咳を繰り返していた。

文吉は手伝わせようと下っ引きの佐平を振り向いた。佐平はちょうど息を吹き返した中巻野太刀の男の頭を十手で殴ってもう一度気絶させ、袂から小判を抜き取っている最中であつた。

「だって、こいつ負けやがったんだから、礼金貰っちゃまずいでしょ」

愛想笑いした佐平の頭を慶吾が十手で軽く殴ってその五両を取り上げた。

「だからっておめえが取っていいわけがねえ。こいつあお上が預かる」

「あ、あ……ひでえや、ひでえや。そんなら給金上げてくれ」

慶吾に悪態を吐く佐平を今度は文吉が引っ叩いて懷紙の落ちている所まで連れて行つた。

手拭で口を覆つた文吉と佐平は、傍に落ちていた木の枝を上手く使つて懷紙を開いた。

佐平が思わず胃の中のものを戻しそうになって口を押さえる仕草をしたままひっくり返つた。

「旦那、やっぱ血でベツトリだ。胸を病んでるようですよ」

「離れろ、文吉。野郎はそんなに長くはねえぜ。死ぬのが恐くねエはずだ」

文吉は腰の巾着袋から火打石を取り出し何度も打ちつけた。枯れ草に移つた火を大きくして懷紙を燃やした。

「川に流すわけにもいきやせんから」

独り言のように呟く文吉に、慶吾も独り言で答えた。

「おろくといったか、あの娘。おきゃんに見えるが、あいつも刹那すぎる臭いがするぜ。似た者同士だな」

風のないおかげで文吉のつけた火から上がる煙は線香のように上つて行つた。

亥之介とおろくは常盤屋の離れの一室を宛がわれた。六畳間で庭

に面しており縁もついている。日当たりも良さそうだったし廁へも近い。最初、人相の悪い浪人者が数名ほど屯する大部屋に通されたが、おろくが夫婦者だと粘った結果だった。勘右衛門が亥之介の腕前を目の当たりにしたことも功を奏したのかもしれない。

しかし、勘右衛門は亥之介が八王子千人同心の倅だと分かると、微かに浮かんだ侮蔑の表情を笑って誤魔化した。

「ま、最近は武士といっても一生刀を抜いたことのない者ばかりが増えております。それに引き替え矢河様はお侍の中のお侍でございますな。この勘右衛門がしっかりお世話させていただきますよ」

千人同心の代表が何度か幕府に御家人身分を確かめたが、評定所でその度に却下されていることを勘右衛門も知っているのだろう。紗枝の父親が幕府代官所への根回しに相当の金を使ったと聞いている。どこで工面したのか知らないが、全くの無駄金になってしまったと亥之介の兄達が話しているのを聞いた。

上目使いに愛想笑いする勘右衛門に亥之介は嫌悪が走ったが、おろくが袖を引いて睨んでいる。また後で世間知らずだと誹るに違いないと亥之介は視線をはずした。金をかけてよく手入れされた庭が見えた。餌が欲しいのか、主人によく似て肥満した錦鯉が泉水から間の抜けた顔を出している。

おろくは二人きりになるとすぐに亥之介のために床を取り、休ませた。甲斐甲斐しく看病する姿は、まるで世話女房そのものである。「……すまぬな」

「何言ってんだい。似合わないよ。もっとしかめっ面してな。その方があんたらしいよ」

一度に六名と剣を交えたことが堪えたのかもしれない。亥之介の寿命が縮まったのではないかと思わせるほど体がだるく力が入らなかった。意志通りに動かぬ四肢に亥之介は焦りを感じた。

急がなければならぬ。体が動くうちに……せめて歩けるうちに紗枝を一目見たい。

紗枝の牧村家とは家格が同じだった。同じように貧しい千人同心

の家柄である。八王子の四季は常に紗枝と一緒にだった。夕暮れの高尾山を飛翔する野鳥、今熊山麓の滝水が岩に当たり碎ける飛沫を想っても紗枝と過ごした爽快な刻がそこにあった。だが、亥之介は矢河家の三男であり、紗枝の弟がいる限り養子に入る道もなかったのだ。それでも両家とも二人に好意的で、何とか添い遂げさせる道を探ってくれていたが、そんな矢先亥之介は体がだるく咳が止まらないことに気付いた。多くのことがあったが、結果的に病が亥之介から身を引かせた。

紗枝に縁談の話が来たのは亥之介の病気が表沙汰になって直ぐだった。亥之介としては心を殺しても祝福するしかなかった。おそらく紗枝の家が早々に手を回したのかもしれない。会うことも叶わなくなったので紗枝の気持ちは分らない。

あれから四年が過ぎた。

今となっては、紗枝の亥之介に対する気持などどうでもよくなっている。今、幸せなのかそれだけが気がかりなのだ。

「元飯田町に行きたい……」

謔言のように呟いた亥之介の言葉をおろくは問いなおした。

「元……何だい？ どこに行きたいって？」

「元飯田町……佐久間甚五郎という旗本の屋敷だ」

「知り合いかい？」

亥之介は首を振った。

「場所は？ 知ってるの？」

亥之介の額にかけてある水に浸して絞った手拭を取換えながらおろくが顔を寄せた。顔を寄せねばならぬほど声が聞き取り辛かった。

「わからぬ。江戸は初めて来た……」

「そりゃあ、あたかもそうだけど……、ちょっと待ってな」

長い間おろくは帰って来なかった。いつの間にか亥之介は眠りについていた。

翌朝、目を覚ますとおろくは朝食の準備をしていた。

箱膳をちよつと持ち上げて、お粥にしてもらったからと笑った。

「そうそう、この旦那様に元飯田町ってどこにあるのか聞いたら、地図書いてくれたよ。この黒い丸があたい達のいる日本橋の新右衛門町で、これが楓川……、元飯田は、お堀をぐるりと廻って反対側らしいよ」

おろくが広げた半紙を亥之介は食い入るように見た。自然と体が起きていた。

「おや、元氣になったみたいだね。やっぱり寝て体を休めたのがよかったんだ」

言われて見て亥之介も体調がよいことに気付いた。隅の方に畳まれた蚊帳と並んで置いてある水の満たされた手桶や鴨居に干してある何枚もの手拭におろくがずっと看病をしていたことが窺える。

「でもね、武家屋敷ばっかしですっごく広い所だから、佐久間って言われてもどこかわからないんだって。そりゃあたいらが住んだと田舎とは違うだろうけどさ」

地図を説明しながらおろくは訝しそうに亥之介の心の内を覗こうとした。

「知らない人でしょ？ 何で会わなきゃならないの」

「その者に会うつもりはない」

「じゃあ、どうして！」

執拗に食い下がるおろくを亥之介は持て余した。しかし、おろくの手してくれた看病のことを思うと、無下にはできない後ろめたさもある。

「理由を教えてくださいな、捜しようもないじゃないか」

亥之介もついに重い口を開いた。それはおろくだけに心の中を開いてみせたということかもしれない。最近にはないことであった。いつの間にかおろくのずかずかと他人の心に入り込んでくる調子に巻き込まれてしまったようだが、それは決して不快なものではなかった。

「牧村の娘が佐久間家に興入れしている……」

おろくの表情が変わった。

「牧村の紗枝様かい？」

「知っておるのか？」

「紗枝様は……」

おろくは言い淀んだ後、急に饒舌になった。

「紗枝様のことは知ってるよ。綺麗でやさしい人だったねえ、あた
いみたいな娘にも偉ぶったところがなく声をかけてくれた。ずっと
昔だけどお手玉、もらったことがあるよ。そうだったの。急にいな
くなっただと思っただらお嫁に行った……んだね。し、知らなかったよ。
へえ、よかったじゃないか。それで、まさか矢河のお坊ちゃまは紗
枝様に惚れてたとか。まさか、相思相愛だったなんてね」

「……そんなとこだ。昔の話だが」

亥之介が恥じ入るように力なく笑った。

「まだ、紗枝様のことを好きなのかい？」

おろくが聞き辛そうに亥之介の顔色を窺った。

しかし、それは亥之介にも予期せぬ問いであった。好きかと問わ
れてすぐにそうだと答えられない自分がいることに戸惑った。なら
ば何故江戸まで出て来たのだ？ 確かにあの時は輝いていた。若者
の誰もが経験する感情の昂りを亥之介も持てたに過ぎないのかもし
れない。紗枝を捜す旅は、外界との接触を制限され続けた亥之介に
とって、畢竟牢の格子から外を眺めるような眩しい世界を覗き見る
感じに似ているかもしれない。二度と戻れぬあの目映い時への郷愁
なのだろう。闇に転がって行くだけの残りの人生にしっかりと対峙
できないでいる亥之介であった。それに空耳かもしれないが遠くで
紗枝が亥之介のことを呼んでいる声がする。それも生まれた土地を
憎み、逃げ出したかったための口実なのだろう。

「好きかどうか……あの頃のような気持ちはない。まして他人の奥
方だしな」

死に向かって歩いている者の気持ちなど、おろくには分かっても
らえまいと亥之介は口を噤んだ。

しかし、今まで必要以上にわざとらしく騒いでいたおろくが、翻然と真顔になってきっぱりと言いつつ切った。

「じゃあ、会わない方がいい。今はきつと幸せにお暮らしになっているんだからさ。お坊ちゃんが出ていったら御迷惑ってなもんだ。胸の中にしまっていた方がいいよ……」

睨みつけるような厳しい目でおろくは亥之介を見据えていた。

「だから会う気はない。本当に幸せなのか見ておきたいだけなのだ」
「だから世間知らずだって言ったんだ。女の気持ちなんて解っちゃいない」

「うるさい！」

激して咳き込んだ亥之介の背中をおろくが慌てて擦った。おろくの掌の温かさに亥之介は邪険に払おうとした手を下ろした。おろくの掌は不思議な感覚だった。亥之介はおろくの手から滲む優しさに酔わされた。ずっとこのまま浸りたい温もりであった。

縁から覗ける常盤屋の庭にも白い百合が咲いている。だが峠で心惹かれたものとは種類が違うようだった。もう一度あの鬼百合を見たい。紗枝のような花……、手折りたいと思っているわけではないのだ。ただ眺めて、そして自分の生を認知してみたいだけなのだ。

無口になった亥之介の背におろくは顔を埋めた。

「……わかったよ、あたいがその佐久間ってお屋敷を探しに行ってくる。知恵絞ってみるから、亥之さんは見つかるまで体を労わっていなよ。紗枝様に会う前に、倒れちゃったらしようがないだろ」

やはり無口なままの亥之介をおろくは後ろから抱き締めた。

「でも紗枝様には絶対に声をかけないって、約束して。遠くから見ただけだよ」

何故、おろくは泣いているのだろう。不思議に思いながら亥之介は頷いた。

日を経ずして、旗本佐久間甚五郎の屋敷をおろくは捜し当ててき

た。

九段坂から少し北の元飯田町堀留に架かった蜻橋こおろぎばし近くにその屋敷はあった。

「行商の魚屋さんやいろんな人に聞いてみつけたんだよ」

褒める亥之介にそれほど嬉しがりもせずおろくは種明かしをした。深編み笠の亥之介は佐久間家の門のはす向かいに植えられている松の大きく地面にうねり出た根に腰を下ろした。その家は両側の大きな屋敷に挟まれてはいるものの、それなりの格式ある門構えであった。高い土塀に続くその門は、亥之介を臆させた。まるで不審者を拒絶するかのように固く閉ざされている。

「この奥方様は芝居見物が好きで、今日は浅草の芝居小屋に出かけているはずさ。もうそろそろ寄り道しなけりゃ帰って来る時分だよ」

亥之介は刻限を推し量るように編み笠の隙間から空を見上げた。

血のような蘇芳色の夕焼けが目染みた。

「芝居見物……、紗枝殿にそのような道楽があったとは、思いも寄らなかった。それとも歳月が人を変えるのか」

決して裕福ではなかった紗枝の家の暮らし向きを思えば、あの頃は芝居見物など夢にも浮かばぬことであつたろう。佐久間甚五郎は、御小姓組八百石の家柄だと聞いた。そして、金のかかりそうな奥方の趣味を許している主の度量の深さを思って、軽い嫉妬を覚えた。

「あの行列じゃないかい？」

行列と口走ったおろくの言葉には皮肉が込められていたが、姑らしき白髪の混じった品のある老婆にかしずいて歩く奥方らしき人物と腰元ひとりに警護の侍二人が蜻橋を渡って近づいてくる。

亥之介は息が詰まる思いがした。だが、目を凝らして女達の顔を見て愕然とした。

どこにも紗枝の姿はなかった。

佐久間の屋敷を通り過ぎてくれと願ったが、門番が出てきて慇懃に門を開いた。

茫然として亥之介はしばらくの間、自分を失っていた。

気付くと門番が門を閉めようとしている。居ても立っても入られず亥之介は駆け寄った。

「この奥方は、八王子の牧村家から輿入れなされたと聞いたが……」

「悪いが人違いじゃないのかい。この近所じゃ、八王子から輿入れなされた奥方など聞いたことがない」

「それではお女中に紗枝という女子は奉公してござらぬか」

執拗に亥之介は詰め寄った。

「聞かないねえ、申し訳ない。門を閉めさせてもらうよ」

対応は丁寧だが、迷惑そうな表情をあからさまに出して、門番は奥に引っ込んで行った。

それでも門戸を叩こうとする亥之介の腕をおろくに止められた。

「何故だ！ どういうことだ。紗枝は……、紗枝はここへ輿入れしてきたのではないのか」

「そんなに熱くなっちゃ体に障るよ。もう帰ろう。葉も飲まなきゃならないし」

亥之介はおろくを振り払った。

「ここではないのかもしれぬ。佐久間という旗本は、他にもあるはずだ」

転んで門柱にぶつかっただおろくが着物の裾を払いながら緩慢に立ち上がった。

「ありやしないよ。ここが佐久間甚五郎のお屋敷さ。紗枝様は、ここじゃない。ここにはいない」

不思議なことを言うと思った。まるで最初から紗枝の行方を知っていたような言い草だった。

「おろく……」

名を呼ばれてもおろくは亥之介と目を合わせなかった。「帰ろう……」と呟くだけだった。

「知っておるのか？ 紗枝がどこにいるのか知っておるのか！」

体を強く掴まれてもおろくは顔を背けたきりで口を閉ざし続けた。また門番が姿を現して、亥之介等を追い払った。

亥之介はおろくの手を引いてさっき紗枝を待っていた松の木の下に連れて行った。

「もう帰ろうよ。紗枝様が八王子を出たのも四年も前の話だろ。亥之さんと紗枝様はもう終わっているんだよ」

「何故、そのように言う？　紗枝のことを知っておるのだな。何故、隠す」

首を絞める亥之介の手に制御できないほどの力が込められて行く。「わ、わかったよ……」

苦しそうに喘ぐおろくが気を失いかけていた。

「穏やかじゃねえですぜ。落ち着きなさいまし、矢河様」

左右から強い力でおろくの首を絞める手を外された。気付くと先日田上軍兵衛と日本橋で争った時にいた十手者達だった。

岡っ引きは、吾妻橋の文吉と名乗った。その隣に立っている文吉と同じ年頃の剽軽な若者は佐平という下引きであった。

「何があったか存じませんが、理由をお聞かせいただけませんか。

あっしも仕事柄このまま素通りってわけにはまいりません」

おろくが亥之介を庇うように慌てて文吉の前に出て来た。

「何でもありません。ただの喧嘩なんです。あたいが我が儘言ったもんだから、つい気が昂っちゃって」

何度も頭を下げながらおろくはそそくさと亥之介の手を引いて立ち去ろうとした。

「お待ちください。矢河様、まだ常盤屋に居候なさってるんでござんすかい？」

振り向いた亥之介は、文吉の顔を訝しげに睨んだ。

「矢河様を見込んでちよつとご相談が……お手間は取らせませんか。ちよつくらあつしらとご一緒したいのですが」

亥之介の顔を窺う岡っ引きの目に邪気は感じられなかった。意図はわからないが御用に関わることに違いない。いつものように

煩わしさを感じないわけではなかったが、目の前の岡っ引きは、紗枝の手掛かりを掴んでくれそうな予感がしてその場を去ることに躊躇った。藁にでもすがりたい気持ちが強かったからに違いない。

文吉は、帰りが近い方がいいだろうからお堀に沿って神田の鎌倉河岸まで亥之介を連れて行った。すっかり陽は落ちて案内されたのは鰻屋の狭い二階だった。入れ違いに客が帰って行った。甘い醬油だれの匂いが店中に充満している。食事にあまり執着のない亥之介であったが、つい腹を擦っていた。

「御病人にだいぶ歩かせちゃいましたが、精をつけておくんなせい。ここの鰻はちよつと評判なんでございます。精をつけてゆっくり休むことが胸のご病気には一番だ」

「知っておるのか？ 拙者のことを」

「おいら達は病気とは縁がねえようだ。お氣遣いは無用に願います」
文吉の隣に座っている佐平も氣楽な笑顔で、仲居をからかいながら注文を頼んでいた。

「酒は、大丈夫なんですかい？」

振り返った佐平が亥之介に尋ねてきた。何とも愛嬌のある顔だと思っただが、亥之介が嗜まぬと答えたために残念そうな顔で仲居のすすめを断っていた。

「ところでさっきはどうされたんです？ 矢河の旦那らしくありませんでしたぜ」

亥之介は口を噤んだ。だが、目の前の文吉は無理強いせずに亥之介とおろくを見比べている。信用のおけそうな男だった。村にいた十手を笠に着て威張り散らすゴロツキとは違うようだ。改めて江戸は広いと思った。この男なら本当に紗枝の手掛かりを掴んでくれるかもしれない。そんな思いに亥之介は訥々と今までの経緯を語り始めた。隣で心配顔のおろくが亥之介を止めようとした。おそらく帰ったら、また世間知らずだと誹るに違いない。

「元飯田町の旗本屋敷にその紗枝さんって方は嫁いだわけでございますね」

「そうなのだ。手掛かりはないのだが、何とか見つける手立てはないものでござろうか」

少し眉を寄せたがすぐに表情を消して「なんとか捜してみましよう」と文吉が応えた。

料理が運ばれてきた。

佐平の腹が鳴って笑いを誘った。ひとりおろくだけが笑わなかった。何か思いつめた様子だった。

「お、佐平。白焼きも頼んだのかい？ 矢河の旦那、こいつあ山葵醤油で喰うんだ。タレ焼きとは違ってあっさりしていて美味エゼ。さ、おろくさんも喰いなせえ」

頭を抱えてじっと箱膳を見詰めるおろくの様子が変だった。文吉の言葉が詰まった。

「……いないよ、そんなところに」

おろくがずっと我慢していた言葉を吐いた。男達の視線がおろくに集まった。

「いないってどういうことござんすかい？ おろくさんは紗枝さんがどこにいるのか知ってなさるのかい？」

おろくがかしらを横に振った。

「知らない。知らないけど、紗枝様は……紗枝様は、女衞の駒蔵に連れて行かれた」

亥之介の体中の力が一瞬抜けて、握っていた箸が落ちた。

「誰が亥之さんにお江戸へお嫁に行ったなんて吹きこんだか知らないけど、みいんな知ってることだよ。紗枝様が泣きながら駒蔵に連れられて、御殿橋、渡っていくのを見ちまったんだ」

「拙者だけが知らなかったと申すのか」

やるせない思いをどのように発散させてよいのか亥之介には判らなかった。さっきおろくの首を絞めた時は無我夢中だったこともあったが、おそらくおろくにすっかり甘えてしまっている証ではないだろうか。

「あたいもさんさん弄ばれた後、駒蔵に引き渡されることになって

たんだよ。手箱から持ち出した金は手付も入っていたんだ」

五十両持ち出してきた話をおろくがすると、佐平が勝手に納得しながら感心した。

「そいつあ高く品定めしてくれたもんだ。目鼻から爪の先、指の反り様、歩きぶりまで見るって言うぜ。おろくさんは上玉ってやつだね。末は、吉原でお職をはってたかもしれないな。確かに気風もいいし、別嬪だし」

「佐平、馬鹿なこと言うんじゃない。誰も好き好んで花魁になるわけじゃねえんだ。だが、女衒の奴等、浅草の山谷に結構集まって住んでやがる。矢河様、蛇の道は蛇ですぜ。あつしら世間様から蛇だって言われております。紗枝さんの売られた先は思ったより簡単にわかるかもしれねえ。それに話を聞けば、失礼だが紗枝さんは上玉だ。極玉かもしれない。廓の方からも手を回してみやすが……」

文吉が虚脱した亥之介を屹度睨んだ。

五十両と言ったおろくの言葉に亥之介は胸がざわついていた。貧しい紗枝の父が郡代に贈ったといわれる賄賂は紗枝を身売りさせて得た金ではなかったのか？ そんな理不尽なことのために紗枝は苦界に落ちることを承知させられたのではないかと思うと亥之介はやりきれなさで胸が一杯になった。幕府が御家人として認めなくても武士であるということは己の矜持ではないのか。金で買うものではないだろう。紗枝の父親に殺意を覚えた亥之介はすぐにでも八王子に立ち帰りたい憤怒で我を忘れていた。

「もし、居場所がわかったらどうしやす？ お会いになりやすかい？」

文吉の声でいきなり現実に戻された。狼狽を隠す間、亥之介はすぐには答えられなかった。

「……親分、調べるだけ調べてくれ。確かに親分の言う通り、誰も好き好んで苦界に身を売る者はいまい。だが、生きておればその中で見つける幸せというものもあるやもしれぬ」

おろくは小さく鼻で笑ったが、文吉は真摯に頷いてくれた。

「さ、冷めねえうちにお召し上がりください。たんと精をつけてくだせえよ。おろくさんも遠慮しねえで」

ずっと胸にしまっておいた秘密を晒して清々したのか、おろくはこんな美味しいもの食べたことがないとご飯のおかわりを頼んでいた。まるで佐平と喰いつぷりで競争しているようだ。亥之介も文吉にすすめられるままに箸をつけた。江戸に出てきて、いや、生まれて初めて美味しい物を食べたと思った。蒲焼の味がよかったのではない。目の前に座る亥之介よりも若い岡っ引きの人柄に違いない。文吉の周りには、夏の暑さを忘れる爽やかな風が吹いている。流石に江戸の男は違う。亥之介はそう思っただけで心が軽くなった。最後に文吉の頼みを聞くまでの短い時間ではあったが……。

文吉等と別れた帰り道、おろくがぼつりと呟いた。

「あの岡っ引き、きつとあたいた等が常盤屋を出かける所からつけて来たんだね」

「そうかもしれんな……」

「どうするんだい？ 請け負うのかい、密偵の仕事」

「鰻を馳走になったしな……」

おろくが馬鹿じゃないのと亥之介の背中を殴った。

文吉は、熱く正義の道理を説きながら、常盤屋勘右衛門が次に抜け荷をする日と場所を調べて欲しいと申し出た。常盤屋に潜り込まない限り手掛かりが掴めないほど、勘右衛門は用心深いようだ。何人も奉行所の隠密が闇に葬られた話も聞かされた。

そんな話を聞かされても亥之介は、おろくほど大袈裟に驚きはしなかった。勘右衛門の目の奥に潜む闇のようなおぞましさに、さもありなと思ったただけであった。

常盤屋では、亥之介を食客扱いにして、自由に振舞わせていた。また、おろくの献身的な頑張りもあって亥之介の労咳も外に漏れてはいない。

亥之介の体調の良い日は、先に下見を済ませたおろくが江戸を案内した。浅草や上野にも行った。どこも目眩のする人波に長時間は

いられなかったが、おろくの元気な姿を眺めているだけで気が休まった。夜、たまに同衾してもおろくと最後までできるようになった。亥之介にとっておろくが初めての女となった。

「亥之さんの子供ができるかもしれないね」

頬を流れ落ちる汗も拭かず、荒い息を整えながらおろくが笑った。何気なくおろくの口について出た言葉が亥之介の胸を締め付けた。

「子……」

そのまま口を噤んで天井を見詰める亥之介におろくが慌てて裸のまま覆い被さった。

「大丈夫だよ。あたいが亥之さんの病気を治してあげる。必ず治してみせるから、そしたらあたいと亥之さんと子供とどっかの長屋で暮らそう。ね？　ね！　親子でさあ、きつとだよ、きつと」

亥之介が返事を返すまで、おろくは問い続けた。執拗に続くおろくの問い掛けは拷問のように亥之介を苦しめた。おろくに負けて頷くと、やっと体を離してくれた。おろくが言ったように長屋の片隅に親子三人で暮らす光景が頭を過った。しかし、それは儚い夢に過ぎない。そんな予感に不覚にも亥之介の頬が濡れた。

夕立が上がった。昼間の暑さが一気に和らいで、庭の草木が生き返ったように、亥之介の気分もよくなった時だった。廊下から亥之介を呼ぶ女中の声が近付いてきた。

「小僧さんが、訪ねてきましたよ。庭にまわってもらいましょうか」

「そうしてくださいまし」

おろくが代わりに返事をしてくれた。不思議そうに亥之介を見るおろくだったが心当たりがなかった。

「おぬしが知らないものを、拙者が知っておるわけがない」

「変な威張り方しないの」

軽くおろくが亥之介の背中を叩いた。何かあるとすぐ叩く女だということに最近気付いた亥之介である。

飴をしゃぶりながら男の子が入って来た。小さく折りたたんだ書

付けをぐつと突き出した。吾妻橋の親分からだろうとおろくも察しがついたらしく、子供に駄賃の波銭を渡して帰した。

さがしもの みつかる かやば河岸に 昼八つ おいで乞う 文吉
書付けにはそう書いてあった。

茅場河岸は近くである。常盤屋のある新右衛門町から楓川に架かる海賊橋を渡ってすぐだ。亥之介はともかくおろくには場所の見当がついている。与力や同心の組屋敷がある八丁堀に隣接した河岸だということも知っていた。

心配そうに見つめるおろくを亥之介は抱き寄せた。

「紗枝のことは昔のこと。過ぎた話だ。それがしは……」

亥之介の口をおろくは人差し指を立てて塞いだ。亥之介の胸の中で、おろくは聞きたくないと首を横に振った。

次の日の昼下がり、文吉が奉行所の猪木舟を用意してくれた。

相変わらず夏の日差しは、亥之介を苦しめる。舟はそんな亥之介への心遣いなのだろう。

日本橋川から霊岸島新堀を下り、大川に出た。そのまま上って行き、待乳山から山谷堀に入って行くという。亥之介には地名を聞いてもさっぱりわからなかった。舟は吉原を目指していた。

真上に上った太陽に当たらないようにとおろくは手拭を頭から被って、必要以上に佐平とはしゃいでいる。

深編み笠を通して吹き抜ける川風が亥之介の心の中も吹きさらしにいった。

「何を見ても、覚悟は、いいですかい？」

文吉は最初にそう漏らしたきりで舟の進む方向をずっと眺めている。

覚悟はできていると答えたものの、亥之介は瞑目してゆっくりとした呼吸を繰り返していた。

覚悟とは、何だろう。何を見ても取り乱さぬ強靱な心か？

心とは何だ！ 心構えというなら、どのように構えればよいのだ？

亥之介は答えの出ない循環する自問自答を繰り返した。それは逃

げているのだとわかっている。おろくが無駄に騒いでいるのと同じことだ。そんなことはわかっているのに吉原へ向かう舟へ乗り込んでしまった。亥之介の意志とは別に、何か抗えない不思議な力に引っ張られているような気がしてならない。

「矢河の旦那は、渡辺綱ってお侍をご存じですかい？」

振り向いた文吉が亥之介に尋ねて来た。文吉の真意がわからず推し量っている内に、話を聞いていたおろくが亥之介の隣に慌ただしく移動してきたので舟が大きく揺れた。

「あたい知ってるよ。鬼の手を斬り落とした強いお武家さんだろ。」

子供の頃、熊と相撲を取ったっていう力持ち」

「熊に跨るのは、金太郎だ」

亥之介がどうでもいいことのように冷たく言い放つと、おろくは愛嬌のある顔で舌を出した。

「おろくさん、半分当たってるぜ」

おろくを優しい目で見た文吉は、もう一度亥之介に向き直った。「吉原の東河岸にお齒黒溝くろぼって、女郎衆が鉄漿水を吐き捨てて真っ黒になった溝がありやす。そこは最も位の低い女郎さん方の切見世が並んでおりやして、お客の袖を無理矢理に引っ張るんで、片袖を千切られたお客の姿が、羅生門で片腕を切られた鬼に似ているところから別名羅生門河岸とも呼ばれておりやす」

亥之介が首を傾げると、文吉がそこへ行くという。

「紗枝さんは、夕顔太夫と呼ばれてたいそうな人気だったようでございます。いや、正しくは、じきに太夫になる寸前だった……」

侍の娘として育てられた紗枝は立ち振る舞いに気品があり、花を活ければ、歌も詠む。当意即妙な受け答えに客の評判も上々であった。いよいよ大夫に昇格すると決まった時、慇懃した花魁の一人が紗枝の頭から溶かして煮え滾る鉛をかけた。顔の半分を覆う火傷の後は消えず、憐れんでいた得意客もその内去り、いつしか羅生門河岸に落ちて荒んだ暮らしをしているという。かつての夕顔時代を知っている者は少なく、今はお夕と名乗っているそうだ。

文吉の話を聞いていたおろくがやりきれない苦痛の表情を浮かべて唇を噛んだ。

「やっぱり、帰ろうよ。会っちゃいけない。あたいが紗枝様だったら亥之さんに会いたくない」

亥之介は返事ができなかった。おろくもあまり強く言って亥之介が頑なになることを恐れている。

日本堤から五十間通りに下りて行った。葦簀張りの茶屋が道の両側にぎっしりと並び立っている。日本堤から吉原の入り口である大門までの距離が五十間であった。極楽と此世の間が五十間、五百間あるほどに気のせく所といわれて、吉原に急ぐ身には長く感じる道ではあるが、亥之介にとっても別の意味で大門口が遠くに思えた。吐き気を押さえるようにゆっくりと歩いた。

屋根のある黒塗り木造の大門をくぐると、右手に廊の出入りを監視する四郎兵衛会所があり、また左方には、与力同心の手先が非常を警戒する番所があった。文吉が番所に挨拶すると、島岡慶吾が無愛想な顔をして座っている。別に吉原の係とは思えないが、文吉の要請らしい。あるいは、文吉の話を聞いて野次馬よろしく出張て来たのかもしれない。

「おいら達はその番所で待っております。その角を左に曲がった行き止まりが羅生門河岸です。九軒目がお夕さんのいる所で……」

文吉は亥之介ひとりで行かせようとおろくを引きとめた。

「案ずるな。見て来るだけだ」

心配顔のおろくだったが、亥之介は無理に笑っておろくの不安を取り除こうとした。

吉原に昼も夜もなかった。人通りのないことを望んだが、亥之介の希望は叶いそうもない。

重い足取りで角を曲がった。突き当りに近づくにつれて、脂粉と汗の臭いに混じって抹香臭い空気が漂っている。線香一本燃え尽きるまでが五十文から百文、さらにもう一本立てることをお直しという。そう舟の上で文吉が教えてくれた。一日にそれほど多くの客が

取れるわけではあるまい。見世の借り賃を払うと、生活するのに十分な収入が得られているとは思えない。紗枝の暮らしに胸を痛めた。八王子の暮らしも苦しかったが、当然ここほどではないはずだ。

吉原伏見町の通りを歩き切り、ついに羅生門河岸に出た。出た所で急に咳き込んだ亥之介は片膝をついて体を支え、懷紙で口を拭いた。少し血を吐いたようだ。目眩が収まるのを待ってまた立ち上がった。

客を引きこもうと亥之介の袂を握った年配の女郎が編み笠の下から亥之介の顔を覗き込むと、悲鳴を上げて逃げ出した。もう一度口を擦ってみるとまだ血が拭き切れていなかったようだ。

（地獄の女も逃げ出すか……）

そう思うといくらか気が楽になり、棟の数を数えて進んだ。逃げ出した女が隣近所に労咳持ちの浪人が来るよと吹聴し廻ったので誰も亥之介を遠巻きに見たまま近寄ってこないのは、ありがたかった。

六……七……八……九

九軒目の女は、そんな騒ぎも耳に入らないのか、長煙管をだらしなく銜えて、柱を背にじっとこちちを見ている。解き下げたままの髪で右半分を隠した顔は、醜く引き攣っていたが紗枝の面影を少しばかり残していた。

「おいでよ。胸を病んでるんだって？　浪人さん、そいつをあちきにもうつしておくれでないか。ね、いい考えだろう。みいんな、江戸中病気にしまおうじゃないか。うつしてくれるんなら、最初の線香はおまけしてあげるよ」

亥之介は編み笠の紐を解く指が震えた。酒で潰したのだろう。紗枝の声がかすれていた。

「……紗枝」

亥之介は編み笠を外して、女に向き直った。

悲鳴を上げた女の体が痙攣した。朱塗りで長尺の花魁煙管を地面に取り落したまま、中へ飛び込んだ。すぐに後を追った亥之介であったが、片足を入れただけで硬直した。

女が合口拵えの守り刀を抜いて構えていたのだ。

「今頃、何しに来やがった！」

構えは紛れもなく紗枝であった。紗枝は小太刀の名人だった。亥之介が真剣で何度も形を繰り返す横で、同じように練習していた。それが言葉の少ない二人の会話だった。

踏み込めないで躊躇している亥之介に向かって甲高い気合とともに短刀が突き出された。身が勝手に反応して後ろへ跳び下がり、切っ先を避けた。

亥之介の視界が涙で滲み、ぼやけ始めた。

紗枝に斬られるなら構わない。

ふとそんな考えが頭を過った。どうせ遅かれ早かれ死ぬ身だ。狂気の様相を呈した紗枝の前に、気付くと亥之介はだらりと両手を下げて棒立ちになっていた。

「紗枝様、やめて！」

おろくが亥之介と紗枝の間に駆け込んだ。

「おろく、なぜ来た。文吉親分の所で待っておれ」

紗枝は短刀を逆手に構え、足をするようにして表へ踏み出してきた。陽の下に出た紗枝は般若のような形相だった。亥之介の隙を窺いながら間合いを計っている。紗枝の腕は落ちていない。

「おや、ろくでなしのろくも一緒かい。つい見なかった間に大きくなったじゃないか。二人揃って落ちぶれた河岸見世の女郎を笑いに来たのかい？」

紗枝の短刀が、おろくの後ろの亥之介に向いている。

「紗枝様……あたいのお腹の中にはこの人の子供がいるんです。亥之さんを殺さないで！」

おろくの叫びに紗枝だけでなく亥之介も一瞬硬直した。

おろくは両手を広げて紗枝の前に立ちはだかっている。まるで亥之介を守るような仁王立ちだった。紗枝に斬られてもいいと思った亥之介の気持がおろくにも伝わったのかもしれない。

泣きじゃくるおろくの声が耳障りなようで紗枝はわずかに眉を顰

めた。

おろくを追いかけてきた文吉が羅生門河岸に出たようだが、成り行きを見守る女郎衆や物見高い客に阻まれて先に進めないでいる。

「何、ふざけたこと、言ってるんだい。二人ともあの世へお行き」

「落ち着け、紗枝！」

亥之介が声を掛けるよりも早く紗枝は腰を落として短刀を突き出してきた。

亥之介はおろくを横に突き飛ばし、突きをかわした。

紗枝が向きを変えた。

「おろく、覚悟をし！」

地面に腰をついて動けないおろくに紗枝が右手を高く振り上げて突き下げた。

「やめなせえ！」

文吉が駆け寄った時には既に、紗枝がおろくの上に倒れ込んだ後であつた。

紗枝の背中が深く斬り裂かれて、おびただしい血が流れ始めた。

亥之介は血の滴る拔身を下げたまま、激しく咳き込んで片膝をついた。

瀕死の紗枝が弱った息づかいで頭をもたげた。亥之介を捜しているようだったが、すでに目が見えていない様子だった。

「毎日……逢いたいと祈っておりました。やっと救っていただきましたね。あり……がとう……それから、おろく……綺麗になりましたよ。亥之介様の目は、おまえを見えています……亥之介様を頼みます。幸せにおなり……」

おろくに覆いかぶさったまま、紗枝が息を引き取った。いつの間に握りをずらしたのか、柄ではなく、切っ先を掴んでいた。おろくを殺す気はなかったのだ。亥之介に自分を斬らせようと背を向けたに違いなかった。死にたかったのかもしれない。死ぬきっかけが欲しかったのかもしれない。きっと紗枝も亥之介に会いたがっていたのだ。ずっと亥之介に斬られて死ぬことを夢に見ていたのだ。紗枝

の心が伝わったのか、おろくが紗枝をきつく抱きしめて泣きじゃくっていた。紗枝の般若のような形相が消え、まるで眠っている赤子のような穏やかな表情に変わっていく。

四郎兵衛会所の若い衆と一緒に、おっとり刀で慶吾も駆け付けた。「騒ぐんじゃねえ！　ここは俺が預かる」

慶吾の大声に会所の半纏を着た若者達が縮みあがった。「女を吊ってくんな」

慶吾の指示に若い衆は戸板に紗枝を移し替えると筵をかけた。浄閑寺に運んで行くのだろう。浄閑寺は投げ込み寺という別名を持つ。その名の通り亡くなった遊女の遺体が投げ込まれる寺であった。

万事手抜かりのない佐平がすぐに機転を利かせて女の手から守り刀を外し、髪をひと掴み切り取った。

「化け物がやっとくたばりやがった」

心ない会所の男がそう吐き捨て女の死体を蹴るのを見たおろくが火のように怒って、殴りかかっていった。

文吉は佐平と一緒にあっておろくを止めた。ひとりでは止められない抗いようだった。

だが、周りの無責任な騒々しさとは裏腹に亥之介は血の気の失せた唇を真一文字に固く閉じ、お歯黒溝に流れ込む紗枝の流した血を見詰めたまま座り込んでいた。

明日を斬る剣

それからの亥之介は言葉を忘れたように、おろくが声をかけても返事すらしなくなった。

おろくは店にたのんで小机を置いてもらい、買ってきた白木の位牌に香炉と燭台を置き、紗枝の髪と守り刀を供えた。花も毎日取り換えるおろくを見ても亥之介は、何の感慨も見せず、手を合わせることにすらしなかった。外に出ることもなくなり、日がな一日、虚ろな目で空を見上げていた。

いつの間に覚えたのか、亥之介が煙草を吸うようになっていた。長い煙管を吹かしながら、焦点の定まらない目で、煙を吐き出している。

ぎこちない煙管の持ち方が亥之介に似合わず、おろくには可笑しかった。

「労咳なのに、そんなもの吸っていいのかねえ。さ、風が出てきましたよ。中に入って、お願いだから」

聞いていない風でも亥之介はおろくの言うことに反応した。手はかからなかったが、まるで心を失った人形のようなだった。

おろくに言われるままに亥之介が部屋の中央に戻った時、珍しく主の勘右衛門が入って来た。

「そのまま、そのまま」

座布団を出そうとしたおろくを勘右衛門は商人らしい笑顔で制した。

「このたびは大変でございましたな。矢河様の読売が飛ぶように売れておりますよ。どれだけ真実を伝えておりますことか、案じられますが……」

亥之介と紗枝のことは、遊女への無礼討ちとして世間を騒がせていた。あの場にいた同心が無礼討ちで処理したので、亥之介にはお咎めがなかった。おろくも読売で騒がれていることを知っていたの

で亥之介の目に触れさせないようにしていたが、どれも化け猫女郎の最期と書かれたものがほとんどで読売に憤りを感じながらも、紗枝の過去に言及したものはなく、それだけはおろくを安堵させた。

「矢河様、こんな時は外に出ることで気も晴れましょう。どうです？ 仕事をしてみる気はございませんか」

勘右衛門の目が光った。おろくも文吉から聞いて、勘右衛門の裏の稼業を知っている。こんな時に、余計なことをしてくれるなという気持ちで俯いた。

「何、簡単なことでございます。ちょっと私が出かけますので警護をお願いしたいと思います、いえいえ、矢河様ひとりじゃございません。他にもあちらに控えておりますご浪人様を連れて行くつもりですが、何と申しまして、ここだけの話、矢河様とは腕が違います」

勘右衛門が拳分亥之介の方に膝をすすめると、声を潜めた。

「実は、こう見えましても繁盛しているせいか目をつけられておりまして、よく訳のわからない者達に襲われるのでございます。今夜も柳橋の方で寄り合いがございまして、たいそう物騒な胸騒ぎがするのでございますよ」

抜け荷は、大坂の港から出た船が江戸の沖合で荷を引き渡し、さらにどこかの蔵に運び込むと文吉に聞いたことをおろくは思い出した。抜け荷の積み下ろしではなさそうだと思った。これは勘右衛門の亥之介の人物を見る試しかもしれない。あるいは簡単なことから引き込んで亥之介を取り込もうとしているのだろうか。おろくは頭を巡らせてみたが、笑顔の裏に隠された勘右衛門の心の奥底まで見当がつかなかった。

「お礼も用意いたしました。どなたがお亡くなりになったのか存じませんが、供養の足しにしてくださいませ。また、今宵、何かあれば同額お支払いいたします」

供養という言葉に亥之介の肩が動いた。

上目づかいに笑みを浮かべて勘右衛門は、亥之介の前に五両を置

いた。

引きとめたい気分のおろくであつたが、亥之介は何かに操られて
いるようにふらふらと刀を下げ勘右衛門について出て行った。

寄り合いは本当だったようだ。海産物問屋の主らしい者達が三々
五々集まつて来ては船宿の大広間に消えて行った。ほどなく三味線
の音が聞こえてきて宴会が始まつたらしい。一緒に来た浪人二人は、
声を掛けても返事をしない亥之介を捨て置いたまま控えの間で大言
壮語を吐きながら酒盛りを続けている。

その料亭は神田川と隅田川の交わる所にあつた。亥之介は窓から
見える屋形船を飽きもせず眺めた。屋形船の揺らぐ灯りと近くの草
叢を飛ぶ螢の織り成す幻想的な光景からなぜか目を離せなかった。
紗枝の魂が浮遊している。亥之介はその錯覚の中に身を酔わせた。

——何故、こんな所にいるのだろうか？ いったい何をしておるのだ。
亥之介は心の中で螢に問うたが、答えは返ってくるはずもなかつ
た。

羅生門河岸にあつた紗枝の見世に踏み込んだ時、「今頃、何しに
来やがった！」と紗枝が叫んだ後に「早く刀を抜け……」と口が動
いて見えたことが亥之介を苦しめている。

（死にたいほど辛かった紗枝の思念に呼び出されて俺はこんな所ま
で出て来たのか？ 斬らずにすむ手立てはなかったのだろうか。別
に容面が醜くなったからといって紗枝が変わるわけではないとい
うのに……。連れて逃げればよかったのか。それでも死にたかつたの
だろうか？ 本当は共に死んで欲しかったのかもしれぬ。やはり紗
枝の後を追うのがはじめなのだ。だが、……許せ。病で死ぬのは恐
くないが、自分では死ぬぬのだ。いや、病で死ぬのも怖い。死にた
くないのだ。紗枝……紗枝……紗枝……腰抜けの亥之介は、どうす
ればいい？）

毎日毎夜考え続けていることであつた。ある意味、紗枝を救つた
のかもしれない。だが救つた行為の代償を亥之介は受けなければな
らないと思ひ始めていた。亥之介の中では無礼討ちで済まされる問

題ではないのだ。

——死をもって償わなければ武士ではない。八王子千人同心は武士なのだ。断じて農民ではない。

自裁できぬ弱さに気付いた亥之介は何としても強い相手に巡り合いたいと考えるようになっていた。その者の刃の下に身を置きたいと願った。

初めて人を殺めた。その相手が紗枝であった。そのことが亥之介の精神を混乱させ、理不尽な考えに拘泥させていた。

広間から手締め音が響いてきた。

四つを過ぎたところで散会になった。

十六夜の月の明かりは提灯が必要ないほど地上を照らしている。それでなくても江戸の夜は明るいと亥之介は思う。二人の用心棒は只酒を飲めたことで至福の顔で名残惜しそうに立ち上がった。

小僧に提灯を持たせて勘右衛門は幾分ふらつきながらも上機嫌であった。二人の用心棒も何も起こらないことを能天気にした体たらくな物腰で、勘右衛門の両側を固めている。

だが、両国広小路からずっと後をつけてくる複数の足音に亥之介は気付いていた。町屋を抜けて、元浜町に架かる千鳥橋を渡った所で亥之介の予想通り十人近いやくざ者に囲まれた。浪人者も三人いた。提灯持ちの小僧が逃げ出す途中に斬られて、橋から落ちた。大きな水音に異変を感じたらしい野良犬が吠え続ける。亥之介と一緒に来た勘右衛門の二人の用心棒は思いも寄らなかつた展開に震えながらも刀を抜いた。

「先生方、お願いいたしますよ」

勘右衛門も予想外の暴漢に声が震えている。

亥之介の目から見てとても堅気の連中には見えなかった。確かに勘右衛門は危ない橋を渡って今の財産を築き上げたことが窺える。恨んでいる者も数多いのだろう。

やくざ者達は声も発することもなく慣れた手つきで匕首や長ドスを抜いた。彼等も金で雇われた殺しの請負人かもしれない。

勘右衛門の右側にいる髭面の用心棒が突然奇声を上げて、刀を振り回しながら斬り込んでいった。恐怖から出た行動に違いなかった。隙だらけの構えに亥之介が危惧を感じた通り、用心棒は四人の男から囲まれて、串刺しにされた後、声も出せないまま戮り殺された。暴漢が迫る前に、亥之介は勘右衛門を後ろに庇って川の前に移動した。まさに背水の陣であったが、これで後ろからの攻撃を防ぐことができる。

二人が同時に斬り込んできた。亥之介の剣が月の光を反射し、その光がうねる様に宙を走った。亥之介がふたたび構えを青眼に戻した時、襲ってきた二人の男の首が飛んでいた。

喧嘩を売られても峰打ちで返してきた亥之介であった。無造作に人を斬ることなどなかった。紗枝を斬って、亥之介の何かが変わったのかもしれない。

もうひとりの用心棒が亥之介の右について勘右衛門を庇うように構えた。先に死んだ者よりは腕が立ちそうだ。

暴漢等は少し動揺したものの、今度は慎重に四人が斬り込んできた。亥之介は一步踏み出すと同時に相手の刃の下に身を置く様にして、目の前の二人を倒すと、横に立った男の右腕を斬り落とした。もうひとりの用心棒も手傷を負いながら、目の前の男を斬り伏せた。

残った四人が互いに顔を見合わせると仲間の死骸をそのままにして闇の中に散って行った。

「いや、矢河殿、お見事でござる。勘右衛門の旦那から話には聞いていたが、まこと凄まじき剣技に感服仕った。身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあるとか、まさに剣の極意でござるな」

息の上がった用心棒は斬られた左腕を自分で縛りながら亥之介の捨て身の剣を賛辞した。腰の抜けた勘右衛門にも少しづつだが元気が戻って来たようだ。だが、言葉を発するまでではなく、亥之介を見て何度も頷いてみせるだけだった。

亥之介は二人に背を向けた。

（弱すぎる。わざわざ刃の下に潜り込んでやったというのに……）

唐突な行為に躊躇った刺客に対して、亥之介の剣が意志とは関係なく勝手に動いてしまった。亥之介は、刺客の弱さへ対する怒りで体が震えていた。

激しい嘔吐が襲ってくる。それは慣れてしまったいつもの吐き気ではなかった。その場に倒れこみそうになる目眩に、奥歯を噛締めて踏み止まった。

常盤屋に戻ると、亥之介は早々におろくの待つ離れに入った。

すぐに手桶の中に喉に溜まっていた血を吐きだした。

うろたえたおろくだったが、すぐに床を用意して亥之介を寝かせた。

いつもとは違う亥之介に、おろくの蚊帳を吊る手が震えた。すぐに水を湛えた桶を抱えて亥之介の枕元に座ると、手拭を絞り亥之介の額の汗から拭いていった。

床から伸ばした手がおろくの手を掴んだ。おろくは吃驚して一瞬手を引こうとしたが、さらに強い力で握られた。まるで救済を求める子供のような手に戸惑いを覚えた。

「あたいで、いいんだね……」

おろくの声が不安と喜びに震えていた。その声が亥之介に届いたかどうか判然としなかった。おろくは今感じた亥之介の心を勘違いかもしれないと打ち消して、白い手を握り返した。

その後は亥之介に声をかけることも憚りながら、目を閉じて呼吸を整える亥之介の苦痛に歪む顔をじっと見詰めた。

亥之介の何かが変わった気がしたが、それが何か見当もつかなかったし、そのことを聞く勇氣もなかった。

蚊帳の中に迷い込んだ蛍がずっと二人の廻りを飛びながらうら悲しい光を放ち続けていた。

翌朝、お頭つきの膳と一緒に勘右衛門が幫間のような物腰で入っ

て来た。

まるで芝居の筋でも語る様に身振り手振りをまじえて昨夜の亥之介の活躍をひとしきり機嫌よく話すと、刀の研ぎ料だと顔を綻ばせて切り餅ひとつ亥之介の前に差し出し帳場へ戻って行った。

海千山千の悪党である勘右衛門の九死に一生を得たような喜びように、昨夜の刺客が一筋縄では行かない者達であったことをおろくは知った。

他人事のような顔の亥之介が煙草盆を引き寄せて、煙管に手を伸ばした。おろくは先に煙管を荒っぽく取り上げた。

「人を……、斬ったんだね」

おろくの悲しみの混じった怒りを受けても表情を変えない亥之介だった。どうしようもなくおろくは亥之介に背を向けると、切り餅を紗枝の仏前に供えて、長い間手を合わせた。亥之介を守ってくれた感謝を紗枝に祈った。

「……、死ねなかった」

ぽつりと呟いた亥之介の独り言におろくは冷水を浴びせられたような衝撃を受け振り返った。亥之介は、自分の吐き出した言葉も忘れた薄ぼんやりした表情で煙を吐いた。

（死のうとしている。紗枝様を追いたがってる）

亥之介がおろくのそばから消えて行くような恐さを、思い違いであってほしいと思った。自分に亥之介を繋ぎとめておく力がないと思うと辛くて涙が止まらなかった。

（紗枝様、亥之介さんがそっちに行っても追いついてください。お願いだから……）

おろくは紗枝の位牌にもう一度手を合わせた。

そんなおろくの心の内も知らぬはずの亥之介が、おろくを背中から抱きしめた。

煙草の甘い香りが亥之介から漂っている。おろくも亥之介の吐き出した空気をそっと吸い込んでみた。

「墓をつくろう」

おろくは一瞬心臓が止まった気がした。紗枝の墓をつくりたいと考えるのが一番自然なはずなのに、誰の墓なのかとっさに判断できなかった。おろくは自分の耳を疑った。

——自分のお墓を建てたいのかい？

声を出さないまま、亥之介に問うた。

「紗枝の墓をつくる。手伝ってくれ」

「紗枝様の……」

おろくはやはり振り向かずにとだ頷いてみせた。

「……、どこにする。やっぱ生まれた所がいいのかな」

おろくの頭の中に八王子の寺のいくつかが浮かんだ。

「いや、俺達を追い出した土地などで墓を建てても紗枝は浮かばれぬ」

故郷へ対する亥之介の憤りがおろくを抱きしめた腕から苦しいほど伝わってくる。

「じゃ、どっかいおいお寺、一緒に探そうね。紗枝様が安心して休める所。早く戒名も付けてもらいたいし……」

おろくの背中で亥之介が頷いた。

亥之介に言われて探した花が、白木の位牌の隣に活けられている。亥之介がなぜその花に拘るのかわからなかった。聞いても亥之介は寂しそうに笑うだけだった。

珍しく部屋の隅まで吹き込んで来た風に揺らいで、鬼百合の赤い花弁も頷いてみせた。

おろくは寺を捜しに行くと亥之介に言い残して、吾妻橋の達磨横丁を訪ねた。

文吉親分には、お澄美というおろくと同じ年頃の可愛いお内儀さんがいることに少し驚いた。

文吉は隣の手蹟指南所でその師匠の藤堂数馬と談笑しており、お澄美に連れてこられたおろくを中に招き入れてくれた。

「お澄美、お茶を入れてくれ。菓子もあつたんじゃねえか？」

「あいよ。可愛い娘にあんまり鼻の下を伸ばすんじゃないよ」

お澄美が元気よく前掛けで手を拭きながら出て行った。

昼を過ぎていたので、子供達は帰った後らしい。

朱の入った子供達の習字がたくさん壁に貼り付けられていた。地面に落書きしながら近所の姉さんに教わって覚えたおろくの「いろは」よりみんな上手で羨ましかった。

文吉に向かい合って胡坐を組んでいる若い男がお師匠さんなのだろう。文吉だけに相談したかったおろくは躊躇った。

「心配しねえでいいよ。ここのお師匠さんは、捕り物好きで気は優しく力持ちってお方だ。相談に乗ってくれる」

亥之介とそれほど歳が離れていず、体型もやや大きいぐらいの数馬を見て、力持ちと口が滑った文吉の言葉に首を傾げた。

「あ、わりイ、わりイ、力持ちってのは言葉のあやだ。おろくさんのいい人と同じように、滅法ヤツトウが強えのさ。今までに何人も悪い奴等をバツサバツサと斬り倒し……」

「やめろよ、おいら人を殺めたことはねえぜ。こいつあ竹光だって知ってるだろ」

亥之介と同じ総髪だが、よれよれの袴を穿いている。壁に立てかけた刀を指さして竹光だと恥じ入りもせず笑う不思議な男は文吉とはまた違った爽やかさがあった。亥之介とは違った。

「中身は、お父上の薬代に化けちゃったのよねえ」

お茶と羊羹を切ったものをお盆に乗せてお澄美が入って来た。

「お内儀さん。それは言わない約束ではないか」

半分怒りながら、恥ずかしそうに数馬が頭を掻いている。

おろくは呆氣にとられるとともに、彼らの明るさが眩しかった。

藤堂数馬は、亥之介とは全く違う類の二本差しだった。よく見かける背筋のピンと伸びた武士ではなくどこか市井に生きる人間のようで、見るから肩に力が入っていない。比べることもないが、亥之介の方がずっと侍らしくて恰好が良いと心の中で思った。だが今の亥之介は、目の前の男以下である。それが悲しかった。

「おろくさん、赤ちゃんができたんだってね、触ってもいい？」

お澄美が恐る恐るおろくの腹に手を伸ばしてきた。

「あ、あれは嘘です。紗枝様の前で言ったのは、そうだったらいいなっていうあたいの夢。必死だったんで、何であたい、あんなこと口走ったのか、恥ずかしい」

「矢河の旦那を守ろうとする一心で吐いた嘘だったわけだね。よく機転が利くもんだ」

文吉が感心してみせた。前に会った時よりも軽口が多くて饒舌なのは、ひよっとして亥之介を紗枝に会わせたことの罪滅ぼしかもしれないとおろくは思った。

「ところで何かあったのかい？ 昨夜近所で斬り合いがあったらしいじゃねえか。常盤屋の小僧さんが殺されたらしいな」

もう、知っているのかと思ったが、朝、勘右衛門が興奮して話して行ったことをおろくは、文吉に告げた。

話を聞きながら、文吉は険しい顔に変わった。

「矢河の旦那もとうとう人を斬っちまったかい。日本橋の決闘を見た時、峰打ちにしてたから、そんなことするお人じゃねえと安心していたんだが。人を斬ったことで心が壊れなきやいいんだが……」

心が壊れると呟いた文吉の言葉におろくは小さく息を呑んだ。

「自分の身が危ない時に、手加減ができるか。こんな可愛いおろくさんが傍にいるのに死ぬわけにはいかんだろうが」

茶を啜りながら数馬が、亥之介のことを庇い、おろくを氣遣ってくれた。

「本当にそうなら、嬉しいんですけど……」

おろくは思い切って不安を口に出した。亥之介が死のうとしていること。そして、死んで紗枝と一緒に葬られたいと思っているらしいことを隠さずに話した。

お澄美も数馬も文吉から羅生門河岸の経緯を聞いているらしく、おろくの話に溜息を吐きながら思案にあぐねた顔を正直に晒している。

「紗枝様は、おろくさんと亥之介様の仲を認めてくれたんじゃないか

ったの？ 紗枝様が死ぬ間際に幸せにおなりって言うてくれたんでしょ」

お澄美が亥之介のことを考え違いしているといった様子で口を尖らせた。

「そんなこと聞いちゃいないそうです。それどころじゃなくて聞こえなかったのかもしれない。今は、自分の殻の中にずっと閉じこもって、心が見えないんです」

腕組みで考えている文吉に代わって数馬が指南所の子供達を諭すような優しい顔をおろくに向けた。

「わかった。おろくさん、早いうちに旦那を連れて常盤屋を出ちまいな。構いやしねえよ。勘右衛門のことは文さん達や奉行所で何とかするさ。これ以上は素人が首を突っ込むことじゃない。住む場所が変われば、きつとその内に時が解決してくれるさ。おろくさんの気持ちも必ず伝わるはずだ」

暫く考えていた文吉もお澄美に背中を叩かれて、数馬に同意した。期待していた答えだったが、何か申し訳ないような気もした。

「いいんですか？ あたい……」

「いいさ。だが、あの後、紗枝さんの持ち物を調べたら、阿芙蓉が出て来た」

「あふよう？」

おろくには、聞きなれない言葉だった。そう言えば鰻屋で亥之介の相伴に与った時、文吉がそんな言葉を口にしていたような気がする。あの時は他人事のように聞き流していた。

「ああ、気分が勝手に盛り上がって、習慣になっちまうと人を廃人にしちまう葉さ。煙管で吸うんだ。今、江戸で阿芙蓉を影で取仕切っているのは、常盤屋しかいねえ。おいら絶対に常盤屋を許すわけにはいかねえんだ。必ずお縄にする」

「あふよう、吸ってるとどうなるんです？」

「最後は、頭がおかしくなってそれこそ人間が壊れちまう」

おろくは心臓が止まりそうになった。

「勘右衛門が疲れに効くからって、あの人に……」

勘右衛門が勧めていたのは、阿芙蓉だったのだ。てっきり煙草だと思っていた。そう言えば、亥之介がそれを吸った後、恍惚とした表情みせる。労咳のせいでおろくとは行為ができないと思っていたが、情を通じることができたのは、亥之介が阿芙蓉を吸った後だったからかもしれない。勘右衛門が阿芙蓉で亥之介を縛りつけようとしているのだ。

「帰ります。あの人、あふようを吸わされている」

蒼褪めたのはおろくだけではなかった。文吉もお澄美も、そして数馬も一様に唸った。

「早く常盤屋を出るのよ。住む所ぐらいだったらうちの人が何とでもするからね」

帰りがけに掛けてくれたお澄美の言葉がおろくの胸に沁みた。

周りの景色が目に入らないほど走った。とにかく早く常盤屋へ戻りたかった。

草履を揃えるのもどかしく部屋に駆け込んだ。

小机の上の鬼百合が揺れただけで、亥之介の姿がなかった。出かけた様子はないので厠にでも行ったのかもしれない。

おろくは煙草盆に近寄ると震える手で煙管を取った。雁首を持って刻み煙草を詰める火皿を臭った。

それでも確信の持てないおろくは亥之介のように火をつけて、ひと口吸いこんでみた。途端におろくは、目眩がして、体中の力が抜けた。すぐに煙管を拉ぎ折って投げ捨てた。

（やっぱり煙草じゃない……）

背中に冷水を浴びせられた衝撃を受けた。

だんだん腹が立って来たおろくは煙草盆を持ち上げると庭に投げ捨てた。

騒々しい音を立てて煙草盆が壊れた時、襖が開いて亥之介が入って来た。おろくは戸惑っている亥之介の襟元を掴んで柱に押しつけ

た。

「どこに行ってたの！ 心配するじゃない」

「いかがした？」

「烏賊がも蛸がないよ。さ、荷物をまとめる。とつととこんなところから出よう」

「落ち着け、おろく」

亥之介がおろくを座らせようとした。崩れ落ちるようにおろくは畳に手をついた。

「吾妻橋の親分の所に行ってきたよ。親分がもういいって、もう密偵の仕事は止めてもいいって言ってくれたんだ」

おろくは亥之介をしがみつく様にして抱きしめた。

「会ってきたのか？ 親分に」

泣きながら頷くおろくが顔を上げた。

「このままじゃ亥之さんが壊れちゃうよ」

「それがしが、壊れる……」

亥之介も思い当たる所があったのだろう。その場に力なく座り込んでしまった。

「ここを出ていけば、わしは壊れぬのか？」

「そうだよ。まだ当てはないけど、親分にも相談してみるよ。どこかの長屋を紹介してくれるかもしれない」

おろくが膝をすすめた。亥之介も文吉のことを好もしく思っている。おろくは何度も文吉の名前を出して亥之介の関心を引こうとした。そして、おろくの必死さが亥之介にも伝わったようだ。

「ここへの挨拶は、いかがしよう」

「そんなものだっていいよ。すぐに出ようよ」

すぐに荷造りをしようとおろくが立ちあがった時、開け放たれたままの襖の陰から声がかかった。

「勘右衛門殿か、何か？」

おろくの胸が高鳴ったが、深い息を何度も繰り返して冷静さを保った。

「入らせていただきますよ。いえ、また、仕事をお願いいたしたくて、参上いたしました」

二人の話は聞かれていなかったようだ。おろくは胸を撫で下ろした。いつものようにおろくは勘右衛門へ座布団を差し出して、亥之介の隣に座った。

「勘右衛門殿、実は折り入って話がある」

「おや、何でありましょう？ 矢河様のおっしゃることで手前にできますことでしたら、なんなりと、仰せつけくださりませ。なんせ矢河様は、命の恩人でございますからなあ」

大店の主らしく勘右衛門は鷹揚に構えて笑ってみせた。

「その仕事を最後に、ここを出ていきたい」

「何とおっしゃります！ 何か私共に落ち度がございましたでしょうか」

勘右衛門は本心から亥之介が出て行くことに不承知の顔で、戸惑った。

「箱根の方に亥之介様の大恩あるお方が住んでいるのです。そのお方に私共が夫婦になる挨拶をしなければ、義理が立ちません。お許してください」

おろくの口から出まかせの嘘だった。だが、勘右衛門は信じてくれたようだ。

「挨拶だけでございますか？ それならまた江戸に戻って来られるわけでございますね。安心しました。そのようなことでしたらごゆっくりして来て下さいまし。あちらの方はよい温泉もあると聞きます。矢河様にとってもご療養によろしいのではございませんか」

「また舞い戻って来るとは、心苦しくて申せなかった。申し訳ない。それではかたじけなく勘右衛門殿のご厚意を受けるといたそう」

「そうなさいませ。ここを我が家とお思ください」

「それで仕事とはまた寄り合いの送迎か？」

勘右衛門の目が僅かに光った気がした。口元だけで笑った勘右衛門は目の前で手をヒラヒラさせた。

「今度は、寄り合いではございませぬ。少々大事な取引があるのでございませぬが、またその荷を狙ってくるよからぬ輩が出てこぬとも限りませぬ」

文吉の話にあった抜け荷に違いない。おろくは平静を懸命に保った。

「拙者一人では荷が重いな」

「ええ、それはもう心得ております。腕に自信のあるご浪人さんをまた新規に五人ほど雇い入れてございます」

「それは、上々。何やら勘右衛門殿は敵が多く、たいそう恨まれているようござるからな」

「人の妬みとは、ほとほと困ったものでございますよ。真似して儲けようというならともかく横から掠め取ろうなどとは不届き千万。さて、それでは早速、出かけましょうか」

亥之介の皮肉に空笑いで返した勘右衛門は腰を浮かそうとした。

「ちょっと待ってください。今すぐは困ります」

おろくが慌てて止めた。亥之介を何処に連れて行くのかさえもまだわからない。何とかしなければと思った。

「どうかなさいましたか？」

言葉は丁寧だが、勘右衛門の顔には鬱陶しさがありありと浮かんでいる。

おろくは勘右衛門の前で跪き、畳に頭がつくぐらい体を折り曲げて手をついた。何も考えてなかったが、勘右衛門はおろくの次の言葉を待っている。

（あたいは、うそつきおろく……。ここは嘘を吐き通すしかないんだ）

下腹に力を込めて顔を上げた。下腹に気合を入れたまま、口の両端を引いて顔の力を逃して笑顔を作った。

「これから医師の所で治療してもらう約束をしております。ご存知でしょうか？ 亥之介様の御病気のことは。取り敢えず処置していただかなければ、お役目に差し障りがあつてはなりません」

おろくはひと拳分身をすすめて声を落とした。

「もし、途中で血を吐いて倒れでもして、旦那様の身に何かあったら、悔やんでも悔やみきれません。今宵だけでも咳を抑えられますよう頼んでみます」

咄嗟に口から出た言葉だったが、勘右衛門の心を揺さぶることができたようだ。

「本当にそんなことができるものならば……」

「できます」

おろくが自信を持って言い切った。

「診てもらうのにどれほどの刻が？」

うまく勘右衛門が話に乗ってくれたようだ。また、座布団の上に座り直した勘右衛門には、それほど亥之介の剣が必要なのだろうか。

「夕刻を過ぎると思います。葉などは私が貰って帰り、亥之介様はそこから旦那様の所へ向かわせますので、ご容赦願えませんか」

「勘右衛門殿、場所さえ教えてくれれば、駕籠でも拾って追いかける」

亥之介が阿吽の呼吸で話を繋いだ。

「それでは、いたしかたございませんな。そうまで仰っていただけなら。それでそのお医者様はどちらにお住まいで？」

「……吾妻橋の近く」

おろくは、他に場所を思いつかなかったが、勘右衛門の顔に安堵の表情が浮かんだ。

「おお、それはよかった。近くでございますよ。歩いても行けるかと。吾妻橋から少し下った所に幕府御米蔵がございます。その一番掘で夜の四つに大切な荷が上がります」

話し始めれば止まらない勘右衛門である。

「幕府御用の荷も含まれておるんですよ。そうだ、おろくさんに鼈甲の櫛をお土産に持って帰りましょう。今夜の荷に入っているはずですよ。きっと似合いますよ。手前どもは暮れ六つから少し手前の黒船町にある小料理屋で待機しておりますのでそちらにおいでくださ

い。判る様にしておきます」

やはり命を助けられたせいだろう。暴漢の首が宙を飛んだことを目の当たりにしたからかもしれない。勘右衛門はすっかり亥之介のことを信用し、剣の腕前を信頼しているようであった。

「亥之介様、そういうことでしたら早めに参りましょう。旦那様をあまりお待たせしてはなりません」

おろくは亥之介の着替えを風呂敷に包むふりをして一緒に紗枝の髪と形見の守り刀を忍び込ませた。

もうここには戻らないと決心した。亥之介のためにも二度と常盤屋の敷居を跨いではならない。

「とんでもねえ話だぜ。お上の蔵を使ってやがったのか」

文吉は、亥之介が怪しまれないよう適当な時間に黒船町へ行ってくれと頼むとおろくが顔を曇らせた。

文吉の知らせに、時を移さず奉行所の役人も町方に変装して、御米蔵から黒船町の周辺を見張り、捕り方の面々も徐々に御米蔵近くの元旅籠町にある西福寺の境内に集まって身を隠した。

夜になり、五つを過ぎた頃に対岸の埋堀河岸から文吉等は舟に乗りこんで静かに大川を横切り二番堀に上がった。一番堀が見通せる蔵の陰に身を隠して、抜け荷が上がって来るのを待つつもりである。文吉の呼子笛で一斉に捕縛にかかる手はずになっていた。

遅れて乞食姿の佐平が莫産を抱えて別の舟でやって来た。

「矢河の旦那は、さっき菊水って料理屋に入っていきましてぜ。すでに勘右衛門は、その二階に居ることを奉行所で確認済みでさア。権六一家の三下もその周りをうろちよろしてましたぜ」

権六は櫓下の権六と呼ばれ、勘右衛門の影の舎弟分として永代寺門前山本町を縄張りにしたばくち打ちである。堀留の地先に火の見櫓があったのでその界隈を櫓下といい、櫓下は深川七場所としても有名な岡場所でもあった。権六が表向きは廓を営み、裏では阿芙蓉

を闇で流して暴利を稼ぎ出しているという噂を最近奉行所が掴んだばかりであった。

「その料理屋には、他に誰が来てる？」

「勘右衛門の番頭で懷刀の靖次に末吉。櫓下の権六と若頭の金治。それに用心棒が七八人つてとこかな。荷揚げの人足どもはまだ姿が見えませんが、どっかで酒でも飲んでたむろしてるんじゃないですかい。ま、役者が揃いやしたぜ」

佐平は壁に木刀を携えて寄りかかっている影に気付いた。

「なあんだ。数馬の旦那も来てらっしゃったんですか。こいつあ鬼に金棒だ」

「佐平殿、その辺で着替えたらどうだ。臭くてたまらん」

「我慢して下さいよ。他に持ってたえし」

佐平は、気を使って少し距離を取った。

「しかし、旦那も好きですねえ。奉行所の礼金も結構貯まったでしょう」

「馬鹿なことほざくんじゃねえよ。俺は文さんの身を案じてだな。こうして出てきておる」

「そういうことにしておきやしょう」

佐平が勝手に数馬の気持ちを推し量って声を出さずに笑い、文吉から頭を殴られていた。

蚊を追い払いながらじっと文吉等は船の着くのを待った。沖合で荷を積み替えた船が、一旦ここで荷物を下ろす。その後はすぐに小分けにしてまだどこにあるかわからない常盤屋の隠し蔵に運び込む手はずになっている。ここで現場を押さえない限り、一緒に運ばれて来た阿芙蓉が江戸の町を蝕んでいくことになるのだ。文吉は十手を握り直して月明かりで浮かび上がる一番蔵をじっと観察した。

四つを小半時過ぎた。文吉が焦れ額の汗を拭いた時、ぞろぞろと人影が一番堀の辺りに集まって来た。号令をかけて指示を出している権六らしい男の後ろに、用心棒に囲まれて立っている小太りの男の影が見えた。隣の白っぽい着流しは亥之介に違いない。なるべく

目立つ色の着物を着てくれと頼んでおいた。捕り方が間違えて捕縛しないようにしたい。

文吉等も闇に隠れて一番堀の方へ近づいて行った。

何処からともなく大きな黒い船が近づき、着岸した。

声を出すなど言われたのだろう。人足達は静かに荷を降ろし始めた。その人足達を囲むように権六一家のやくざ者が作業を見張っている。

文吉は呼子の笛を吹いた。

隠してあった御用提灯が一斉に立てかけられ勘右衛門一味を照らし出した。

「お上の御米蔵で荷を上げるとは、言語道断。恐れも知らぬ所業である。神妙に縛につけ」

捕物出役姿の町奉行所与力の声が一番堀に響き渡った。

強盗提灯を持った鉢巻姿数名の同心の指示に従い、捕り方が大挙して抜け荷一味を取り囲んで行った。

「何てことだ。何故ここがわかった！ 先生方、お願いしますよ」

勘右衛門が喚きながら亥之介の後ろに隠れたのを文吉は見逃さなかった。

金を貰った俄か用心棒等は、捕り方が現れたことを全く予期していなかったらしく動揺をみせたが、腹をくくったのか刀を抜いて、斬りかかってきた。勘右衛門が剣の腕前を事前に吟味したらしく、捕り方の何人かが斬られて重傷を負った。

それ以上に手強いのが権六一家の子分衆であった。捕まれば後がないと死に物狂いで手向かってくるので捕り方側が怯み始めている。慶吾が相手構わず十手で殴り飛ばしながら同時に捕り方に向かって叱咤激励しているが、相手の勢いは一向に衰えない。

意を決した文吉がその中に飛び込むと、文吉を追い越す様に数馬が駆け抜け、木刀を振るった。

数馬が次々と用心棒やごろつき共を倒して行く。

亥之介は、数馬の動きに見惚れてしまった。勘右衛門が選り抜い

た手練を斬り結ぶことなく一撃で打倒している。無駄な動きがなかった。今までに見たことのない鋭い太刀筋に亥之介は釘づけになった。まさに亥之介の希求を叶えてくれそうな剣であった。

亥之介は勘右衛門を守るという口実で剣を構えたまま戦闘に参加していない。

その亥之介の背中に隠れた勘右衛門が「逃げ道を作れ」と切羽詰まった声を出して、しがみついていた。藤堂数馬の太刀筋に酔い痴れていた亥之介は、ひどく邪魔された気分になった。

文吉と佐平が亥之介の近くで常盤屋の奉公人共をお縄にしている。「文吉親分、こっちだ」

亥之介は、勘右衛門の首根っこを掴むと文吉に向かって勘右衛門を放り投げた。

「くそ、裏切りやがったのか！」

佐平に殴られながら勘右衛門が恨みに燃えた目で亥之介を睨んだ。やがて数馬の活躍もあり小半時で全員を捕縛できた。

押収した荷を開くと御禁制品に混じって案の定南京袋に詰められた黒褐色の阿芙蓉が出て来た。

「あの劳咳侍はどこに行った？」

島岡慶吾が暑いのか、鎖帷子を脱ぎながら、文吉の傍によって辺りを見渡した。

文吉も付近を捜してみたが、亥之介の姿はどこにもなかった。誤って捕縛した様子もない。

「達磨横丁の長屋におろくさんを迎えに行ったのかもしれやせんね。ちよっくら先に帰らせていただきます」

文吉は、数馬と一緒に吾妻橋の長屋へ帰ったが、亥之介の来た様子はない。おろくが心配そうに橋の袂へ駆け上がった。

とうとう一晩明けても亥之介は現れなかった。

まだ、陽も昇る前であったが、おろくは気が狂わんばかりに何度

も朝靄の立ち籠める通りに駆け上がった。

「どっかで倒れてるんじゃないだろうか。大川に落ちて流されたんじゃない……」

「落ち着きなせエ、おいらがきつと捜し出す。矢河様は今回一番のお手柄だ。江戸中のお手先や下っ引きを総動員しても捜し出してみせやすから、今は、おいらの所で旦那を待っていなせえ」

それでもおろくはじつとしていられなかった。

「今、佐平が御米蔵の辺りを捜してる。帰って来るのを待ちねえ」

文吉は無理矢理おろくを引っ張っていこうとした。

おろくが明け始めた墨絵のような土手の先を見て声を上げた。

陽炎のような人影がこっちへ近づいて来るのが見えた。落とし差しの刀とは別に、もう一本朱鞘の刀を手に持っていた。

おろくが息を呑んだ。今までに見たことのない殺気が亥之介の体から立ち昇っている。おろくが怯えた。まるで別人のようだった。

文吉も背中が粟立った。

亥之介は、おろくの呼びかけにも答えず、文吉の前にふらりと立った。

「手蹟指南所の師匠殿に会いたい」

感情のない凍りついた声であった。

「数馬さんに何の用だい？」

「真剣での勝負を所望……」

「どうしたんです？ 勝負がしたいってどういうことなんです」

「拙者は、常盤屋の用心棒だ。金も受け取った。用心棒としての仕事をせねば義理が立たぬ」

「何、訳のわからねえこと言ってるんだ。あんたは、おろくさんと所帯を持ってじつくりと静養しなきゃならないんだろ」

「おろくとは所帯など持たぬ。おろくを江戸まで連れて来るのが、初めて会った布田宿での約束であった。約束は守った」

「亥之さん……」

おろくが文吉の前に割り込んで来た。亥之介はおろくを押しつけ

て長屋の木戸を潜ろうとした。

「待ってくれ。数馬さんに会わせるわけにはいかねえ。出て行ってくれ」

文吉が押し返そうとすると、亥之介は一気に刀を抜いた。文吉の逃げるのが遅かったら本当に斬られていたかもしれない。

おろくが悲鳴を上げた。

「お澄美っ！ 十手を投げてくれ！」

障子が開いてお澄美が顔を出すより早く、丸腰の藤堂数馬が飛び出してきた。

「大きな声で話しているから聞こえたよ。俺はおまえさんと斬り合うつもりはねえぜ」

数馬が文吉を庇おうとするのを反対に文吉が数馬を押し戻した。

「勝負を所望いたす。おろくから聞いた。竹光では勝負ができぬゆえ、持ってきた。昨夜おぬしが常盤屋の用心棒から叩き落としたものを拾っておいた。悪い掬えではない。受け取れ」

亥之介が、数馬に向かって二尺五寸の刀を投げた。

「常盤屋の用心棒として、ひとり縄目を逃れたからには、のうのと生きておるわけにはいかぬ。常盤屋を壊滅させたのは、おぬしの剣だ」

「馬鹿なことやってんじゃねえ！」

食い下がる文吉を数馬が、制した。

「何が何でも、俺と試合がしてえようだ。理屈じゃねえみてえだな」刀を受け取った数馬は、それを腰に差した。

「ここでは長屋に迷惑がかかる。土手に上がれ」

数馬の決意が伝わってくる静かで低い声だった。

「承知した」

亥之介の目が俄かに爛々と輝いた。

口の端だけで笑う亥之介は数馬に背中を見せないままゆっくりと後退ずさって行った。

「何、馬鹿なことやってんだよ。数馬さんまで一緒になって」

文吉の声に振り向いた数馬が心配するなと口を真一文字に固く閉じて目で頷いた。

おろくは声をかけられないままおろおろして後を追う。

何事かと長屋の住人も恐る恐る外に出てきたが、文吉が一喝して家に戻した。

十手を持って出て来たお澄美が文吉の止めるのも聞かず、おろくの後を追いかけていった。

亥之介は青眼に構えた。

「確かに修練を積んだ構えだぜ。だが、所詮自己流だな」

数馬は刀を抜かずに足場を確かめていた。

「おぬしは？」

「俺も似たようなもんだ」

そう口の端で笑って数馬は右足を前に出すと半身に腰を屈めた。

「抜かぬのか？ 居合か」

「調子に乗って近づくんじゃないぞ。間合いに入りや、バツサリいくぜ」

刀を押し下げた数馬が鯉口を静かに切った。

文吉とお澄美が飛び出そうとするおろくを抱きとめている。

「心配するんじゃない。数馬さんに任せておきな」

だが、そう言う文吉にも自信はなかった。日本橋で亥之介の剣技を見た後、慶吾は数馬より強いかもしれないと確かに言った。

少し昇った朝陽が靄を散らし、大川の水鳥が一斉に飛び立った。

文吉の目に陽炎のように冷たい炎が立ち昇って見えたのは錯覚か。亥之介が横に揺れた。

瞬間、数馬の剣が鞘走りして、空を切った。風が起こって炎が消えた。甲高い金属がぶつかる音が二度聞こえて、互いに鏢迫り合いに入った。相手と剣を打ち合わせることもなく一刀で打ち据える数馬が鏢迫り合いをするなど珍しいことであった。力勝負を避けた亥之介が後ろに跳んで間合いを切った。また、数馬は刀を鞘に納めて居

合の構えを取った。

今度は長い睨み合いが続いた。互いに牽制しながらゆっくりと右に廻っている。時々、数馬が踏み込んで目にも止まらぬ速さで剣を抜くとすぐ鞘に戻した。咳を堪えながら亥之介も合わせて冷静に対処している。いつ斬られたのか数馬の左袖が裂けて少しだが血も流れていることに気付いた文吉は無意識に十手を構えた。いざという時には決死の覚悟で飛び込むつもりなのだろう。おろくもお澄美も息を吞んで二人を見入っている。いつの間にか出て来た長屋の連中も数馬の応援をすることを忘れて、瞬き一つしない。いや、息詰まる真剣勝負を前にして、瞬きすることも動くことも忘れていたのだ。

今度は、脇構えにした亥之介が右に回り込みながら踏み込んで下から斬り上げた。数馬が上から斬り落としてその剣を受けた。また、鋭い金属音がして力勝負になった。数馬の剣に刃毀れが目立ってきた。亥之介が数馬の力を左に流して胴を払おうとした。咳を堪えた分だけ一瞬遅れ、亥之介の体中の血が逆流した。案の定、亥之介の剣を柄で受けて弾き返した数馬はそのまま横に跳び、鞭のように剣を振って態勢の崩れた亥之介の肩の上に刀を落とした。

腰から崩れ落ちそうになったおろくをお澄美が支えた。数馬の握っている剣の反りが、逆になっていることに気付いたおろくは思わず心の中で数馬に手を合わせた。

肩を打たれた亥之介は、激しく咳き込んで膝をついた。

「咳を押し殺した瞬間、おまえさんの力が抜けた。俺ア、命拾いしたぜ」

数馬が刀を鞘に納めた。

過度な緊張が続いたためだろう。亥之介は喀血し、夥しい血で辺りの草叢を蘇芳色に変えた。

駆け寄ったおろくに背中を擦られながら亥之介は恨めしそうに数馬を見上げた。

「何故、斬ってくれなかった。おぬしなら武士の義を立ててくれると信じて来たのに」

「馬鹿野郎！ 何が武士の義だ。勝手に俺のことを人殺しにするんじゃない。おめえさんの寿命は、おめえ一人のもんじゃない。みんな決まってる命の長さ、それが尽きるまで精一杯生きろ！」

「……生きるというのか。紗枝をこの手で殺めたそれがしに生きるというのか」

「くだらねえ義だとか忠だとか言っただけで侍を辞めれば簡単なことだぜ。もっと違うモンが見えてくるはずさ。俺みたいによ」

数馬の亥之介を見る目が怒っていた。

（こやつは武士を捨てておるというのか？ それでもこれほどの強さを保てるというのか！ 武士以上の強さを持つおぬしは何者だ？ 拙者も武士を捨てればおぬしのように強くなれるのか？）

訝しく見上げる亥之介の肩に数馬が腰を落として手をかけてきた。おろくとは違った温かさを持つ掌から何かが亥之介の体の中に流れ込んで来た。

「話は文さんやおろくさんから聞いたよ。でもよ、その紗枝さんってお人もおめえさんに死んでくれと言ったのかい？ そうじゃねえだろう。生きて、てめえが何のために生まれて来たのかよく考えてみるこただ。一緒に考えてくれる人間もすぐ傍にいるじゃねえか」
おろくが亥之介の背中を擦る手を休めずに数馬に向いて何度も頭を下げた。

「文さん、大八車はねえかい。それに誰か要らねえ布団があったら持って来てくれ」

立ち上がった数馬がずっと心配で見守っていた長屋のみんなに声をかけている。数馬が何をしようとしているのか亥之介には見当もつかなかった。

「死んだ婆さんのもいいかい」

大工の女房のお捨がすぐに子供を連れて長屋へ走って行った。

刀を鞘に納めた亥之介がそれを脇差と一緒に数馬に差し出した。

「捨ててくれ……」

八王子千人同心は武士なのだと矜持を持ち続けて来た亥之介であ

ったが、目の前にいる男のように生きたいと思った。そんな亥之介の心が伝わったのだろう。数馬は何も言わずに差し出された刀を受け取ってくれた。

亥之介はもう歩く力も残っていなかった。それほど数馬との戦いに精力を使い果たしていた。

布団を敷いた大八車に亥之介は寝かされた。最初上から筵を掛けられた亥之介であったが、首を傾げた文吉が死骸を運んでいるように縁起が悪いとお澄美に搔巻を持って来させた。

「暑いけど我慢してくんな。人目に顔を晒しても構わねえんだっから取っちまってもいいが」

文吉の笑い声は今し方の死闘などなかったかのように爽やかだった。

亥之介を乗せた大八車を数馬が引いている。文吉とおろくが後ろから押して吾妻橋を越えた。

「どこへ行くんです？」

おろくが不安そうに文吉に尋ねるのが布団を被せられた亥之介の耳にも届く。

「着いてからのお楽しみ」

意地悪く笑った文吉に、おろくの荷物を持って追いかけて来たお澄美が文吉の背中を殴った。

お澄美の癖が自分と同じだとおろくは笑った。

「小石川の養生所でしょ。もったいつけないの」

「養生所？」

おろくの不安そうな声が亥之介に聞こえる。そんな亥之介も初めて聞く言葉だった。お澄美ではなく文吉が答えている。

「ああ、お上がやってる養生所だ。貧乏人でもちゃんと診てくれる。設備も整っているから心配ねえよ」

享保七年（一七二二年）正月二十一日に小石川伝通院に住む町医師小川笙船が目安箱に投書した。笙船は翌月に評定所へ呼び出され、

將軍吉宗は大岡忠相に養生所設立を命じる。同年十二月二十一日に小石川薬園内に養生所は開設された。建物は柿葺の長屋で薬膳所が二カ所に設置されており、当初の患者収容数は四十名ほどであったが、評判になるとともに収容の数も医師の数も増員されている。

「江戸ってすごい所だね。何でもあるんだ。そんなところがあるなんて知らなかった」

おろくが甲高い声で驚いている。

「おろくさんも看病できるように頼んでやるよ。ついでに養生所で仕事があればいいんだがな。無理ならごり押しの得意な八丁堀の旦那に頼んでやるよ」

数馬の言葉が心強く亥之介の胸を打った。おろくの歓び様が目に見えるようで、よほど首をもたげておろくを見たかったが、布団から涙に濡れた顔を出すのは憚られた。

「賄いでも洗濯でも何でもします。やらせてください」

おろくが何度も数馬や文吉に頼んでいる。

途中で追いついた佐平に、数馬が交代だと命じて有無を言わず引き手から抜けた。

「ええっ、まだ下谷にも入ってねえってのに……、後、神田に湯島に本郷だろ。気が遠くなるなあ」

「文句を言わないの」

佐平がお澄美に怒られていた。

おろくも笑っている。黴臭い布団に身を包み亥之介はむず痒い思いをしながらずっと大人しくしている。ずっと寝たふりをしているままだ。おろくは掻卷の上から、ポンと拳骨で軽く殴ってきた。おろくのことだ。きっと零れ落ちる涙を隠すために見えない亥之介へあかんべえをしているに違いない。

そしておろくは亥之介の病室を鬼百合で一杯にしてくれることだろう。大八車の乗りごごちは決して良くなかったが、いつの間にか亥之介はまどろみ始めた。遠ざかる意識の中で亥之介の耳におろくの笑い声がまるで子守唄のように届いてきた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9461u/>

天蓋の百合 【吾妻橋の文吉留書】 参

2011年8月12日03時27分発行